

5712
1596
1

早稻田大學附屬
圖書館

寄第

經書

第 143 號

第 1 卷

此書館外不許帶



明
歸
卷
1595
1-2



三易由來記序

天極參神之命。正循環來。而昇平

二百有餘年

王化之美。洋溢于海內。而擊壤鼓

腹之澤。至盡于茲矣。嗚呼時臻

哉。賀茂五十鐸之二流。復古清



真之學浸々然。日新月熾而靡
率土邊地。不浴乎厥餘。洪為雖
然。有至蜂衙螳垤之羣。管窺蠹
測之徒者。尚未能漱滌於祖述
天憲章家之口氣。動結黨立錮。而
雷同響應。夸下畝子彼一時篡逆

之戎位。而妒議於赫萬古生賢
之

天統之狂輩。為實天地不可容之
巨辟罪哉也。蓋斯痼疾也。數千
百年間。沈淫黏著于厥骨髓。而
雖以扁倉萃。豈有治療可施之

術耶也。咨所以厥爾之者何乎。
宜哉。聖者儒之日月燈。則謂聖
謂聖之一言。有子鈞之威重。而
彼魯叟鄒兒。亟媚繡於其德。誣
譽於其善之明證。歷々然則凡
雖傑出子古今之碩儒先醒弗

能翹惟恭々默々爾有片言隻
語加乎諸焉。是以我真聖太昊
伏羲氏之神撰。天地萬物之易
道。輾遷蹈襲來而自有連山歸
藏周易之三變。爾未相傳而以
易學縱橫乎一世者若干數家。

矣。而僉以見後使于彼擬聖周
文之姦掌中而未嘗知其篡奪
欺罔之讖記殆二千八百有餘
年矣。今也赫々

參神之嚴鑒不容於厥隱逆下乎
天機自然之命。而教平田氣吹

屋翁有斯三易由來記之。哥撰
焉。蓋此篇也。此翁嚮所論之八
家之一。所與易者不知易威者
而八卦之基原。三易之履歷。及
歷世諸家之議論。厥當否褒貶
昭々乎三千年間之朦霧一時。

氣噴去。而太昊氏玄鑒微妙之
真方位。燦然明于目下也。吁此
舉也。至此翁突起於卓犖。慨
之銳毫。銳而直。訐於姪昌之隱
毒。沉姦之明微。的證。洵々然。辯
懸於長川。論鞫於迅雷之絕妙。

境者不覺發聲拊髀。面弗能手
斯須。閣於此卷。焉。雖然。使此篇
抵于彼。憲章黨錮之耳目者。則
當惟驚震絕叫。而伊直唾罵。而
道非聖人者。以法予。亦直喝訶
而道狠信聖人者。犯我。

邦之法然彼固朝槿秋蟬之缺々
者不可語晦朔春夏之小消長。
况於章部紀元之大段落乎哉。
嗚呼世之英傑活眼之君子冀
嘉納乎斯易說之詳審。洵歎於
古今而發出乎斯。睿諤骨鯁之

大議論者。畢竟所令此翁之赤
心忠鬼之然而教之。洽擴充敷
置乎宇內者。則太昊氏卦爻之
正真目。確乎與我。
秋津本洲之神典曷異乎哉。然則
天地真神諸靈之感格感兆。豈

與擬方位猥亂之修術。金砂可
同白語哉也。我黨之小子慎而
勿忽於此翁之此賜矣。

參河國山中御宮
二靈奉祀之神司

嘉永元年 初秋 竹尾源正 跋題

三易由來記卷之上

大歷 平篤胤撰述

駿河國 新庄道雄
武藏國 碧川好尚
常陸國 竹來道彦 同 杖

古者庖犧氏之王天下也。仰則觀象於天。俯則觀法於地。觀鳥獸
之文。與天地之宜。近取諸身。遠取諸物。於是始作八卦。以通神明
之德。以類萬物之情。

此第一條也。繫辭傳不採り及出せり。普通の本は地之宜
喜が本義。與地之間。諸本多有。庖犧氏乎。古く太昊伏羲氏
天字と云するふ依て補有り。とも稱ふ。實少く我を扶桑本州の神真大國主神あるが。彼

赤縣州モロコシの渡り往ユカして國を闢き。彼処ニ志はし王ヲ爲りて。其蠢民ニらニ始めて三才の道を傳スふ也。天地萬物の易道ヲを觀察して。八卦ヲを作授け賜ハふ事也。赤縣太古傳及ヒ此記の本編ヲ委曲ト小説トなれり。今更ニ云ハハシ也。本編トモ太昊古易傳を云ハ
下ラれル是記ニ入ル。其授け遣リ賜ハふ事ヲ易法の後ニ連山帰蔵周易ト云フ三易ニ爲レれる由來ヲ論ハゲ故ニ云ハハシ。かく名付ツたり。前ニハ思ハル旨ありて。易學三十年論ト號シはて本文始テ作ル八卦ヲ云フと云フ。河より圖ヲを出し洛より書ヲを出スる其象數ニ則テを取り。かニ仲觀俯察して。よリ八の經卦ヲを作リ。其ニ八節ヲ合シて乾坤震巽坎離艮兌の名ヲ命シ

て本命本卦の定則を示し八索トは自然ニ其吉凶の應何ノ事ヲ。また其別卦六十四ニ各々其名を命シて大象辭ヲも定め。ふニ其每卦の六十四變ヲを索メて。其時變ヲをモ習ハふニ法ヲを立テる事ヲ也。合シて心得ベシ。此ニ本編ニ委曲トせる事ありて。今更ニ委ク也。
曰易之乾坤。足以窮道ヲ通ス也。八卦ニ可以識吉凶。知禍福矣。然而伏羲ニ爲レ之。六十四變ニ周ニ空ニ增ス以六爻ヲ。所以原測ニ叔清ニ之道ヲ。而擣逐萬物之祖也。

此第二條也。淮南子の要略ニ採リたり。抑かレの篇ニ劉安ニ已リ。淮南子二十篇ヲを作り畢テ後ニ其書ヲ著セる用意ハ。人ヲ

して凡より博に致し。兼たり精に致さばく軀載せる由を。
述たる自叙あり。然れハ其篇首ハ天作為書論者。所以紀綱
道德經緯人事上考之。天下揆之地。中通諸理。至未能押引玄
妙之中。戈繁然。足以觀終始矣。總要舉凡。而語不割判。純樸靡
散。太宗懼人之昏。然弗能知也。故多為之辭。博為之說。又恐
人之離本。就末也。云々と言ひて。今の本文を出せり。著書の
用意。よこ々小如。此有後き事。小々々。已この三易由来記を
撰する。此訓小効。小
連山歸藏周易の三つ小。變轉せる次第を論したる趣の所
思えを列安の著書の用意
小相似たるも甚奇くこそ。はて易之乾坤。足以窮道通意也
と云。唯小乾坤とのみ言々れと。此を父母を云ひて。震巽坎

離艮兌の六字を含蓄せる小て。周礼に謂ゆる經卦。乃ハの
三爻小成の八卦を云牙也。易の乾鑿度ハ乾の三爻云ひ
父ハ母ハ六字の八卦を兼たる文
也。文意ハ其小成の八卦小て。三才の道を窮め。天下の意
をも通する小足るとあり。○八卦可以識吉凶。知禍福矣と。
八卦と云。此ハて。周礼に謂ゆる別卦。乃ハ六爻大成の
六十四卦を云牙也。六十四卦を直ハ八卦と稱する。文意ハ
事ハ本編より已ハ委く説九の文意ハ
小成の八卦小て。道を窮め意を通する小足るを。更ハ重卦を
る六十四卦を以て。吉凶を識り禍福を知る道をも。始めし
と云牙るなり。○然而伏羲為之六十四變也。高誘注ハ八
變為六十四卦。伏羲示其象と云牙るを然る言小て。彼別卦

六十四を以て。吉凶を識り福禍をも知るふ足るを。又その
八々六十四の卦ごとくに。六十四の変象をあらわす法をも示せ
る由あり。是謂ゆる変爻法なり。前の經卦別卦の事あり伏
義と云ふれども。其經卦及び別卦ハ。伏義の辨あり如く。伏
義の起れる由を云ふと欲する。故に。周室増以六爻也。高誘注
云。周室謂文王也。と云ふ依如く。伏義氏の一卦六十四爻の
法有る也。周文王が心とより更ニ毎卦一爻一爻の判断を
増始めて。其占をさすに立たる由なり。此よし委く。第五
條論ふを見て知
るべはて是より下の文意を。あつ次こみ増益し來れる事
也。淑清の道を原測して。萬物の本祖を擔逐をむ為れり。

言ひて。上の夫作爲書論者云くと云ふる文を結び。其子書
の九より博ふ致せる證例と為たるなり。淑清善也深也。清
を澄也潔也。擔は
審み同じ。深澄の道を原測す
る。萬物の本祖を擔逐する義あり。然れども八の經卦の作を更
に。其子重初て六十有四の別卦と爲して。各々その卦名
を命し。又その別卦の。各々六十四爻を爲へき筮法。及び其
大象の辞も何も。其原を伏義氏に出たるを疑ひかくれむ。
亦本編論する説ともを合す。是を以て晋の王弼が易註
に。伏羲重卦と云ひ。唐の孔穎達が正義に。其説を用ひて。重
卦之人。諸儒不同。九有四説。王輔嗣業以爲伏羲重卦。王輔嗣
の説あり。此を必を淮南子
の説に據れらるむ。鄭玄之徒以爲神農。此をもと易積
算法の孔語あり。

退各得其所
曰庖犧氏没神農氏作日中為市致天下之民聚天下之貨交易而

此第三條也。繫辭傳云。庖犧氏始めて八卦を作する事を云
る條不接せるを採れり。但し此小用なき文也。庖犧氏没

出たる説あり。次條小引くを説ふ。孫盛以為夏禹。此を何小據れり。説史遷
以為文王。此を史記より古く何くも書小所見たる。乾
鑿度云。垂皇策者犧用著在六爻之後。即伏羲已重卦。此の乾
鑿度云。本編小引用せる鄭玄注の書小非也。謂由乾坤今
依輔嗣と言ふ。此説を用ふべし。王應麟者六家玉弼虞翻
貝伏羲鄭玄曰神農孫盛曰夏禹揚雄司馬遷曰文
王孔穎達陸希聲以弼為是。有るも此意あり。
と云。牙海没え。出小對せる言ふて。日没の没小同じ。抑大昊
庖犧氏ハも皇國の神真大物主神小坐をも。彼國人を教
導せむ為小。暫し彼處小出現して。その功竟て皇國小歸り
給ふ也。其をかの方言小没と云るなり。然るも秦漢以來こ
知らむ。死にせる事とのみ心得たるを甚く誤れり。此ら其
事とも委しく。赤縣太古傳小論れ。今更云云。更扶
桑國政小もそのはて太昊氏の隱没せるのち。追次ひて神
農氏の作する小非を。其間小出たる數氏有れど。然も大
功績小無り。然も彼國の國柄として。人情固より薄惡小
也ハ。伏羲氏の教牙漸く小頼れて。又慢亂小あり。以來しを。
神農氏ハ伏羲氏の。彼國に生遺せる數子の中。少典と云

ひしが子不了。炎帝とも称ふ。聖徳の人ありし故。祖聖の遺法を受行ひて。種々小教導を為さり。及ひ其出自の委しき考ふる。太古傳小註し。よ別小太古傳の系図は。文面と云ふをも著せれる。其書等小就て見るは。如く都市を為して。民を致し。貨を聚めて。交易の道を始し。事不勿論あるが。此文易と云ふ。易法の交易を成せる義をも兼説たる傳あり。是を以て司馬貞が補史記小。教人日中為市。交易而退。各得其利。遂重八卦。為六十四爻と云ひ。羅泌の路史小。於是通其變。八々成卦。良以為始。所謂連山易也。故又曰連山氏と云ふ也。若この本文。易説を兼たる。非八卦を作さる事。載せらる。次小此條は。出を治る。何の由もなき徒事あり。此条の次小黃帝の事を出せる。は。爻通

易事を載せられた。易説あり。然らば其易法の交易と云。何ある趣ありむと云ふ。王海小。連山者八風始於不周。實居西北之方。七宿之次。是為東壁營室。於辰為庚。於律為應鍾。於時為立冬。良震巽离坤兌乾坎連山之序也。見え。此王海小。王洙曰。とて出せれと。決めて古連山易の遺説あり。其を良を西北。不周山の方小居さる。太昊氏の古易の真方位にて。曾下周易の多し。以來の人。あとの思ひ寄は。き事小非ざるを以て辨め。古方位小良の西北ある事。本編の委しく注。晋の皇甫謐が帝王世紀小。夏人因炎帝。而曰連山。連山易。其卦以純良為首。夏以十三月為正。人統良。漸正月。故以良為首。而見えたり。抑太昊氏卦頌。乾坤震巽坎离兌。然るを神農氏右の如く。唱牙は。次算を交

錯せる故也。爻易をとは傳牙らむ。然れど其を唯卦頌の唱
牙を。爻易せる耳。こゝ有れ。其卦この方位を易なる義は
非也。思ひ紛ある事あり。其太昊氏の易は艮の正位を
北。方と有る一つを以て。余の七卦の方位は。易は艮居西
事を辨ふべし。然るに玉海に。連山乾始。於子坤始。於午
至周易。尊乾卑坤。其體乃定。は。此爻易せる傳牙を重卦の
事と思ひ誤りて。彼京房の易積算法。孔子曰。八卦因乎伏
義。暨子神農。重乎八純。聖理玄微。と云牙るを始。此文を玉
海及ひ困
字紀聞に引たる。周易の鄭玄注に。神農重卦と云ひ。魏志に。
易博士淳于意が言ふ。庖羲制八卦。神農演之。為六十四卦。皇
甫謐が帝王世紀に。庖羲氏作八卦。炎帝重八卦之數。兜八々

之體。為六十四卦。と云ひ。上引く神史記にも。重八卦。為
六十四爻。と見へたれ。また同作の史記索隱。此等諸説
みお誤りなり。其を前本に挙たる淮南子の文に。伏羲為之
六十四變。と云ひ。王弼が注に。伏羲重卦と云牙る。正説に
る。既に委しく論ずる如く。玉海に。薛氏曰。神農
氏初經。本庖犧八卦。蓋八卦成列。而六十四具焉。神農氏因之
也。と有る。如し。然るに隋志の五行類に。神農重卦。經二卷
して。神農の。さて此易を連山易と稱する義を。並紀に。連山
易。艮為首。艮為山。山上山下。是名連山。と云牙る。如し。然れ
ど神農氏を。連山氏とも稱する。此易法を立たる故也。

是を以て路史ハも良以為首。所謂連山易也。故亦曰連山
氏ト云アリ。鄭玄說ハ連山象山之出雲連ニ不絶ト云ハ也。
紀ハ云ハ雲氣出於山ト也。云ハ云ハ也。共ハ非
あり。神農氏の号を云ハ列山氏トも厲山氏トも諸書ハ所
見たるは連山ハ轉語ハありト也。此ハ羅泌ハ志ハの云ハりト也。
然る小周礼ハ注ハ。社子春云。連山ハ宓戲ト之言ハ。玉海ハ。王洙
曰。山海經云。伏羲氏得河圖。夏后氏因之曰連山ト云ハ云ハ也。
甚ハじキ非説ハれリ。殊ハ山海經ハ此文ハなりト。わハ彼書ハ有
此ハ説ハとも覺スる事ハありト也。然レれト此説ハを路史ハの自注
最ハも不審ハし。此ハ夏后氏ハ世ハ也。此易法ハを用ハひシ事ハ。第四
条ハ注ハ云ハ如ハありト。水經注ハ。連山易曰。有崇伯鯀。伏于羽山
之野。世紀ハ。連山易曰。禹娶塗山氏之子。名曰攸女。生ハ塗山氏

有ハハ。夏世の傳文ハ偶ハ存ハれル物ハなりト。然レして此易法ハ。周
世ハも用ハひテ來リしト。漢以來ハ都ハ廢ラれテ。其藝文志ハも
た隋の經籍志ハも載セざレ。唐志ハも始めて。連山十卷ト出ス
まシ。其ハ隋の世ハ。劉炫ト云ハし者ハの偽作ハして。賞ハを求メし
物ハなりト。玉海ハを始め諸書ハ不見レなりト。其ハ中ハも委ニきテ。連
山易十卷見唐藝文志。按班氏六經首周易。九夏商之易絶不
聞。隋牛弘購求寓内遺書。至三十七萬卷。魏玄成等修隋志。晉
梁ハ以降ハ亡逸ハ篇名ハ亡シ不ハ具レ載レ。皆不聞。所謂連山者。而至唐始出
可ハ乎北史。劉炫傳。隋文。葱訪因籍。炫因偽造連山及魯史記上。
之。馬端臨據山ハ以為炫作ト。或有然者。蓋炫後事。發除名。故隋志
不録。而其書尚傳ハ于後開元中。盛集ハ群書ハ仍ハ入レ禁中ト。耳。鄭漁仲
謂。此書常時不存。則宋世ハ已無レ可ハ考ハ今ハ亦未ハ能ハ必ハ其炫也。
歸藏ハ今亦不傳。故二書惟論其大槩。不能致レ詳ト云ハ云ハ也。
回神農氏没黃帝氏作。通其變。使民不倦。神而化之。使民宜之。易窮

則變。變則通。通則久。是以自天祐之。吉无不利。

此第四條也。繫辭傳。前條小接續也。と採り。但し本書也。神農氏波黃

帝堯舜氏作。と有れ。と堯舜字。此小要あり。これを省きたる。黃帝も少典氏の子あり。神農

も曾孫榆罔の代りて作れり。國語も九黃帝記の巨も神農

も少典の子あり。と有る。然れども同母の非を其由を赤縣

太古傳及び三五本國考春秋命歷叙攷の委しく云ふ。凡そ

就て見。けり。文意を事久しき時ハ弊る。を。變通して神化

を。凡そ。民倦をして之を利とに。故小文を持して廢を。此

易は變通を尚ひて。天子祐を得る。所以と云ふ。義あり。其

變通せる易法を。歸藏易と云ふ。小。是雜卦傳の孔穎達が正

相襲故。歸藏名卦之次亦多。異於時と云ふ。意を。其は黃帝

月あり。連山易の出来し事も。是は。惟て思ふ。序し。其は黃帝

傳小。帝取伏羲氏之卦象法而用之。扱神農所重六十四卦之

義。求其重卦之義。乃名所制曰歸藏書也。と見え。此は神農

説あり。路史の於是正坤乾。分當坎倚象。衍數以成一代之。思

坤以為首。所謂歸藏易也。故又曰歸藏氏。と云ふ。る。わ。了。知。了

序し。二書の文之。甚く切りて引た。此易法小。坤を首と為

て。依事を。帝王世紀小。殷人因黃帝曰歸藏。歸藏易。以純坤為

首。坤為地。萬物莫不歸。而藏於其中。殷以十二月為正。地統故

以坤為首と見え。礼記の礼運小。孔子曰。我欲觀夏道。之。杞。得

夏時焉。鄭玄曰。杞夏后氏之後也。得夏。我欲觀殷道。之。宋。得坤

乾焉。宋。殷人之後也。得會易之。坤乾之義。夏時之等。吾以是觀

書也。其書存者有歸藏。坤乾之義。夏時之等。吾以是觀

之と見えたり。また玉海の玉珠云々。此義重卦。乾上坤下。則无闕。无静則无動。此歸藏所以先坤後乾。首万物之母。無闕の正義を始め歸藏易の坤を首とせざる説を数ふる。小暇あら然もハ變通と云ふ。伏羲氏の易。乾坤と有る卦頌を坤と地あり。萬物之ハ歸藏を云ふ義を以て。坤乾と變唱し。其餘の卦頌とも易なる由あり。是以黃帝氏の亦歸藏歸藏氏とも稱せざる。路史云へる。如し。然るを歸藏元よりの説あり。其歸藏氏の易ある故。歸藏易中いふ。紀たる説。本来たがふ。若この説。如くを歸藏と云ふ。号え。何の謂ふ由ると云。ここの説。如くを歸藏と云ふ。説あるとや。又これ就て思ふ。亦も連山と云ふ。民を首とせざる。依れる名ある事もある。神農氏を列山氏と稱ふ。列山と云ふ。地の生れし故あり。云ふ説あり。連山列山。厲山。同語の轉あり。其連山易をものせざる。由り。連山氏と稱し。その連山氏の生れし地ある故。連山と

も厲山とも列山とも云ひし。さて玉海の朱震云。歸藏初見む。其本末を正しくあり。さて玉海の朱震云。歸藏初經者。伏羲初画八卦。因而重之者也。其經初乾初爽。初艮初兌。初蒙初离。初蹇初夷。卦皆六画。即此八卦也。八卦既重。又在其中。此卦名とももの事もある。不次條。周礼疏。今歸藏坤開筮。帝堯降二女。以舜妃。又見節卦。云。殷王其國常母谷。太平御覽。歸藏云。有白雲。自蒼梧入大梁。昔女媧。筮張雲幕。救占之。曰。吉。昭。九州。日月代極。平均土地。和合四國。黃帝將戰。筮於巫咸。明夷曰。昔夏后啟。乘龍飛。以登于天。畢陶占之。曰。吉。朱震易叢引。歸藏之乾小畜。亦と有ると以て。其易書の大凡を知る。種々の書を引たるを出せり。然れと右の卦名こそ。黃

帝氏の遺法ふめれ。此文等を後小殷の世小記せる文の偶
小存れる物なり。斯く此易法も、周、世まで用ひしを、其よ
後を廢られて、其精説を傳はらる。志のハ有れと。此易も連
山易也。後漢、世も傳はらし事也。桓譚、新論、小據てそ知
られり。其ハ玉海、小桓譚新論、連山、八萬言、歸藏、四千三百
言、歸藏、藏於大上、此語見於桓譚新論、則後漢、時連山、歸藏、猶
存、不可以藝文志、不列、其目、而疑之、至隋、世之連山、則偽作、求
賞者、耳、と云、さか如し、此事、然る、小隋、世、二書、これ既
小亡、乃、し故、小其經籍志、小連山、の目、なく、歸藏、十三卷、晉、
大尉、參軍、薛貞、注、と出して、末、小歸藏、漢、初、已、亡、按、晉、中、經、有
之、唯、載、卜筮、不、似、聖、人、之、言、以、本、卦、尚、存、故、取、貫、於、周、易、之、首、

以備、殷、湯、之、缺、と見え。此文、小本卦、尚存、と云、り、る、と、か、初
以、備、云、玉海、小史記、正義、七錄、云、歸藏、載、卜筮、之、書、雜事、中、與
書目、晉、大尉、參軍、薛貞、注、今、但、存、初、經、齊、母、本、著、三、篇、文、多、缺
亂、不、可、訓、叙、宗、文、目、漢、初、有、歸藏、已、非、古、經、今、書、三、篇、不、可、究
矣、と見え、又、参、軍、薛、貞、唐、司、馬、膺、各、有、法、按、七、略、無、歸藏、晉
中、經、薄、始、有、此、書、隋、志、因、之、至、宋、僅、存、初、經、齊、母、本、著、三、篇、鄭
漁、仲、以、為、其、文、雙、其、義、古、後、學、以、其、不、文、則、疑、而、棄、之、連、山、牙
以、亡、者、要、當、復、過、于、此、噫、連、山、夏、易、也、歸藏、商、易、也、禹、貢、之、文、
千、古、叙、事、宗、焉、商、書、簡、潔、而、明、肅、或、有、過、于、周、者、孰、謂、夏、殷、之
文、不、節、々、也、隋、志、赫、此、書、惟、載、卜筮、不、類、聖、人、之、旨、蓋、唐、世、因
疑、其、偽、若、鄭、以、晚、出、為、辨、則、馬、端、臨、之、說、盡、之、矣、と、云、り、
右、の、書、等、小、歸藏、を、漢、初、已、亡、と、云、り、る、說、等、ハ、委、う、ら、文、小
布、次、條、小、り、總、て、論、小、と、視、る、所、し、

因伏羲氏始畫八卦。因而重之。為六十四卦。及于三代。實為三易。夏

曰連山。殷曰歸藏。周文王作卦辭。謂之周易。周公又作文辭。

此第五條也。隋書の經籍志に採り。是より先、前漢の藝

卦、以通神明之德、以類萬物之情。至于殷周之際、紂在上位、逆

天暴物、文王以諸侯、順命而行道、天人之占、可得而効於、是重

序卦之屬十篇、故曰易道深矣。とも云ふなり。此に伏羲氏の始

て八卦を画し、つて之を重して六十四卦と為るが、夏殷

周の三代も及んで、分りて三易と為る由也。三易の名

大、周礼春官小大卜掌三易之灋。一曰連山、二曰歸藏、三曰周

易。其經卦皆八、別皆六十有四云々。と有る是なり。また目書

三易、以辨九筮之名、と有る注に、筮用三易也、とも云、或説繫

辭傳、伏羲氏始畫八卦、と云ひて、作易、と云ふを、而して易之

其經卦とは、三畫小成の八卦と云ふ。三易とも、小經卦皆八

あり。別卦を皆六十有四と云ふなり。姬昌に至りて、始て重卦

せり。と云ふ説の無誓あること言ふも更なり。其に尚書洪

範に七誓疑中ふ。曰貞。曰悔。と有る鄭玄注、内卦曰貞、外卦曰

悔、と有るを以て、周以前も重卦有して、著明なり。鄭玄

注に、洪範の疏に引たり、再引多し。玉海に、業氏三易辨云

とて、三易經卦皆八、其別皆六十四、經者其常、別者其變也、其

為六十四者、自伏羲以來、未之有、異也、と見え、日知録にも、重

卦、不始文王、と云ふ條あり。今、周礼の文に、左傳の穆姜

引、語を引、支論あり。洪範を引、論あり。是、周易正義に、三易

引、語を引、支論あり。洪範を引、論あり。是、周易正義に、三易

引、語を引、支論あり。洪範を引、論あり。是、周易正義に、三易

鄭玄易贊及易論云夏曰連山殷曰歸藏周曰周易連山者象山之出雲連之不絕歸藏者莫不歸藏於其中周易言易道周普无所不備案世譜等群書神農一曰連山氏列山氏黃帝一曰歸藏氏並是代號周易以文王所演故謂之周易猶周書周禮題周以別餘代故易緯云因代以題周是也此鄭意見之說中歸藏の説みも叶牙れと連山の説を非あること前条の論よりして知るし周易の説を殊に非れり斯る正義の案も周易の説は後得たりと連山歸藏を代号と批れりと思ふも本末違へるる上二条も云へるる以て辨れり後路史も世紀云夏人因炎帝曰連山商人因黃帝曰歸藏文王廣六十四卦著九六之爻謂之周易或曰連山之文禹代之作歸藏之文湯代之作周易之文特文王之作至爻辭則周

公而象象則孔子也。あとも見えたり。象象とは象傳上下象傳はて卦辭とは即謂ゆる象辭也。每卦の下に乾元亨利貞あとも有ると云ひ爻辭も八毎爻の下に初九潜龍勿用あとも有ると云ふ。王充論衡の正説篇も古者列山氏之王得河圖夏后因之曰連山。歸藏氏之王得河圖。殷人因之曰歸藏。伏羲氏之王得河圖。周人因之曰周易。其卦皆六十四。文王周公因象十八章。究六爻。世之傳と有る。象十八章とは六十四卦の象辭と作れりとも云ひ。究六爻とは三百八十四爻の辭と作れりとも云ひ。王充云姚信云連山氏得河圖夏人因之曰連山。歸藏氏得河圖商人因之曰歸藏伏羲氏得河圖周人因之曰周易と有るを論衡が説き批れりとも見ゆりとも有り三氏各々河圖を得たりは白く云へるる誤なり。

八卦の原は伏羲氏に出たりと三代共其
八卦を襲ひて少る趣意を替はるは依るや
は了文王姬昌
が作る彖辞ハ。總て六十四章あり。然るに其六十四章と
十八章と云ふ所以は。周易上篇の卦数三十。下篇の卦数三
十四あるが。二篇の卦ともハ。二卦つゝ顛對し。その表裡友
對を依も有る。二卦一卦ハ約納するが故也。上篇十八卦
下篇もまゝ十八卦と成る。其章も彖せる故也。よく言
可。其顛對々ハ。屯と蒙。需と訟の如きと云ひ。反對々上篇ハ
六つあり。乾坤坎離頤大過とあり。下篇ハ二つあり。中孚
小過とあり。是れ上篇十八卦。下篇もまゝ十八卦ハ約納
す。其卦も彖せる故也。彖十八章と云ふは。上下篇共ハ各
十八卦とある由也。先づ文王後事。馬融陸續等以為卦辞
云。るん。周公正義ハ。文辞多文王後事。馬融陸續等以為卦辞

文王。文辞。周公。今依之而用之。おと鄭衆賈逵等以為卦下之
彖辞。文王所作。又下之象辞。周公所作也と云ふ。然ハ本文の
説々も馬融鄭衆等が遺説ハ拠たる説と聞ゆれ。委の
ら又。其ハ前後ハ挙る古説とも考ふる也。又辞とも皆姫
昌の作り云ふれハ。又辞も本姫昌の作り創めしと。全く
作り畢さりし故也。後ハ姫旦也。其挙る故き。切畢たりは
む。是を以て其辞ハ。姫昌後の事も多しと見えたり。又辞ハ
此事多きは。明の郝敬久周易正解の初ハ。いと委曲
了記し辨るる説あり。其説の較畧ハ下ハ拠し出ると候
て見。抑周易上下篇ある彖辞又辞の。周室ハ成れる事也。の
淮南子ハ。伏羲為之六十四變。周室増以六爻と云ふる語。

及ひ今引出たる文等九更なり。尚其古説の多る中、乾
鑿度也。孔子曰。伏羲氏之王天下也。始作八卦。質者无文。以天
言此易之意。夫八卦之变象感在入。文王因性情之宜。為之節
文。鄭玄注。九六之辞是也。此文意ハ伏羲氏始めて八卦を依
りて。變易の意を云ふるもての事。亦て。彖又の辞。亦如きも有
り。夫を八卦の变象を感通するも人々の識り因りて
異あるハ。豫て一定し難き故なり。斯て後ハ。文王人の性情
の宜み因りて。六十四卦の節文を為れり。其ハ謂ゆる九六
の文辞是。易緯通卦驗云。處戲一名。處方丹。蒼精。作易無書。以
書序驗曰。矩衡神五鈴。興象出亡微應。鄭玄曰。矩。法也。鈴。猶要
以。為政令。而不書。但以畫。見其事之形象而已矣。中。多處義。依易。仲命德。維紀。衡。周文
増通八々之節。轉序三百八十四文。以繫王命之瑞。謀三十五

君。常其一也。興亡殊方。各有其祥。亦も言なり。仲と云。四方
を四角と云ふ。四方ハ乾坤坎離と配し。四角ハ震巽艮兌と
配する由あり。文意ハ伏羲四方四隅ハ八卦と配して。人ハ
道德を命し。術行を紀とりしと。文王の八々六十四卦の
節。亦彖辭を増通し。その三百八十四文。亦每文ハ。文辭を
轉序し。我ハ屈する三十五諸侯と相謀りて。其一を常ハ。上
兵亡の方と殊ふして。各々其祥有らしめ。革命の時を得て。
王と成序き。天命の瑞を繫け。是等ハ諸説を。照し。応て。致
す。民ハ信せしめたる義あり。是等ハ諸説を。照し。応て。致
ふる也。今ハ周易上下篇々。六十四卦の畫象と。其卦名に
古昔の真物ありて。象辭又辭とも。姬昌父子ハ。任意の文あり
る也と論ひ無し。故。是を以て其象文の辞也。王命の瑞祥と
係りて。般の天下を棄たむと欲する。逆意ハ見ゆる危辭と
も多あり。一々の事ハ。非也。由りて來ると。漸ふして。既

小古人も其祖父古公單父の云ひし者の時あり其意を狭
めると云ふ如く其心巧ハ姫昌に至りて大成一其
子姫絜に至りて遂なり此由其も彼周易上下篇の
大第八條の論を見えて知るべし其も彼周易上下篇の
彖辭を依れる時あり是より早く姫昌その擬聖の才を
以て殷の諸侯を懐けぬの論語も三分天下有其二と云へ
る如く蠶食せる目多く遂に事起るを法き跡あり一故に
紂王怒りて羗里に彼を拘囚たりし間の事なり此も早く
王囚於羗里而作易と云ひ史記の周本紀及び自序にも其
囚羗里蓋益易之八卦為六十四卦と記し朱熹の本義も
繫辭傳の易之典也其於中古乎作易者其有憂患乎と有る
所の註小夏商之末易道中微文王拘於羗里而繫彖辭易道
復興とそ是を以て其名を周易と稱して夏殷の易と名を
異ふ為たり其とも周易正義の連山起神農歸藏起於黃

帝周易起於文王乃周公此謂周易也と云ふるを思ふ所し
鄭玄が易贊の説小周非地也周易以純乾為首乾為天天能
周而於四時故名易為周易以十一月為正天統故以乾為首
と云ふると甚はて古易ハ僅に大象の類ある義理の説
のみそ有れ彖文辭の如き占辭を有ると無く其象感を人々
各の器識に任せ在るを周易に至りて始めて嚴めしき
一定の占辭を卦爻ことと繋具なること上引き出たる
文等ふて灼然あり但し玉海に張行成曰とて伏羲始畫八
天易也商曰歸藏地易也有法數而未書文王曰周易人易
也始有書矣と云へるを始り絶て占例の書は無し趣ハ
云ふる説有れと周易上下篇の如き事としき物こそ無り
つれ少々の占例を載せる未書とも有りし事を連山歸
藏の遺文等も彼此見えまた左傳にも往はて右三易の
周易あらぬ占辭を見ゆるふても所知たり

占法乃起也。春秋襄九年傳。遇艮之八。云々の注。周
禮大卜。掌三易。然則雜用連山。歸藏。周易。二易皆以七八為占。
故言遇艮之八。史疑占易不利。更以周易占變文。有正義
也。洪範言。三人占。則從二人之言。孔安國云。夏殷周。卜筮各異。
三法並卜。是言筮用三易之事也。七為少易。八為少會。其文不
變。九為老易。六為老會。其文皆變。周易占九六之爻。傳之諸筮。
皆是占變文。連山。歸藏。占七八之爻。二易並亡。不知實然以否。
穆姜司空季子。並於遇八之下。別言周易。知此遇八非周易也。
と有る也。其大凡と知る也。思以爲筮。必以三代之法。故
太卜掌三兆三易。義禮特牲。少牢。筮皆旅占。卜從父筮之。其卦
遇。盡不引易文。注云。卜人而用筮。不能通三易之占。其所見雜

占言之。劉炫云。成十六年。筮卦。遇復。亦是雜占。則筮法。亦有雜
占。不必皆取易。辭。云々。又程頤曰。古之筮者。兼用三易之
法。衛元之筮。遇屯。曰。利建侯。是周易。或以不變者。占。季支之筮
遇大有之乾。曰。目復于父。敬如君所。此周易。辭也。既之乾。則
用變矣。是連山。歸藏。或以變者占。○上件三易の事。不就。明
の楊慎。分升菴外集。小周禮。太卜。掌三易之法。干令升注曰。天
地定位。山澤通氣。一章。此小成易也。帝出乎農。齊于巽。一章。此
連山之易也。初乾初爽。初艮初兌。初萃初雷。初登初巽。此歸藏
之易也。又大或。歸藏易。今亡。惟存六十四卦名。而又闕其四。與
周易不同。需作渚。小畜作畜。大畜作畜。艮作振。震
作登。升作赫。剝作僕。損作負。咸作誠。坎作榮。謙作兼。遯作遂。蓋
作蜀。解作荔。无妄作毋。亡。家人作散。象人。渙作人。又有瞿。欽
規。夜分。五卦。零。需。林。禍。馬。徒。三復。名。卦。小成者。伏羲之易也。而
不知當周易何卦也。と見えたり。○十七

小成以六十四卦為大成之所始。夫大傳祇有八卦而小成一語。此又增中成大成。原是不安。且其云小成者。就撰著者言之。謂十八變中九變而成內卦。抵為小成。必十八變而後引伸。觸類能事已畢。非謂伏羲祇畫八卦。至神農而後重之。八卦因重。皆伏羲事。與神農無與。大傳自明。其以小成屬羲易。固已可怪。此大旨。理九乃有說。於中少以十有八變。其由本編及此次卷之末條。論及若宋人造為因重之法。會易層累加畫。指為先天。而以先天屬伏羲。乃取說卦中羲易卦位。指為後天。以為此文王易。非羲易。則悖誕極矣。小成大成。无天後天。易大全。少易少會。皆前人己言。而更易其說。遂致懸絕。始知

偶然之言。後將憑倚。不可不慎。云云。如左別條。小宋人以羲天始。于陳摛。此竊于竇伏。羲先天。神農中天。黃帝後天。之說。而改襲之。然不及中天也。先天後天。見又言。若中天。則楊雄。太玄列九天之名。曰中天。非中古之謂。後有造。夫九連山。陽藏二為陳氏。中天。圖者。已可笑矣。且云。子。夫九連山。陽藏二易久亡。按北史。劉弘奏。購求天下遺書。其時劉炫。頗有名。遂造偽連山易。魯史記。等百餘卷。上之。已取賞。去而後。有訟之者。免。以除名。鄭樵謂。連山易。至唐始出。皆偽書也。崇文總目。載歸藏。易。晉太尉參軍。薛貞。注。右。隋世尚存。十三卷。後祇存初經。齊母。本著三篇。至唐。世又有司馬膺。注。十三卷。至宋。亦亡。是以道謂。商易。為張天覺。偽作。或云。即司馬膺。作。故吳澄。謂。連山。歸藏。列光伯。司馬膺。偽書也。此等之。事。尤。晚。不。前。條。已。若。偽。元。墨。作。此等之。事。尤。晚。不。前。條。已。若。偽。元。墨。作。

元包亦以先天後天太少金易立卦一如千贊所言此則倚傍
不定道者元包の事ハ玉海曰唐藝文志衛元嵩元包十卷後
異夏曰連山殷曰歸藏周曰周易而唐謂之元包其書一也包
者藏也言善惡是非吉凶得失皆藏其書也晁氏志坤為首因
八卦也爻為六十四卦之次又巽運蕃說原二篇統言卦體不
列爻位自云周易元包一也元包以坤為首乾後之義祖歸藏
宋乾道中張行成以蘇李徒言其理未達第桓譚新論云連山
其數蓋元包數總義二卷と見へたり

八萬言帛藏四千三百言連山藏于蘭室帛藏藏于大止則必
漢時尚見其書故守數鑿之如此惜不可考矣と云へる也皆
理れたる説等なりた、周易のみ小関の事等の論ひなり。 けり次條より以下

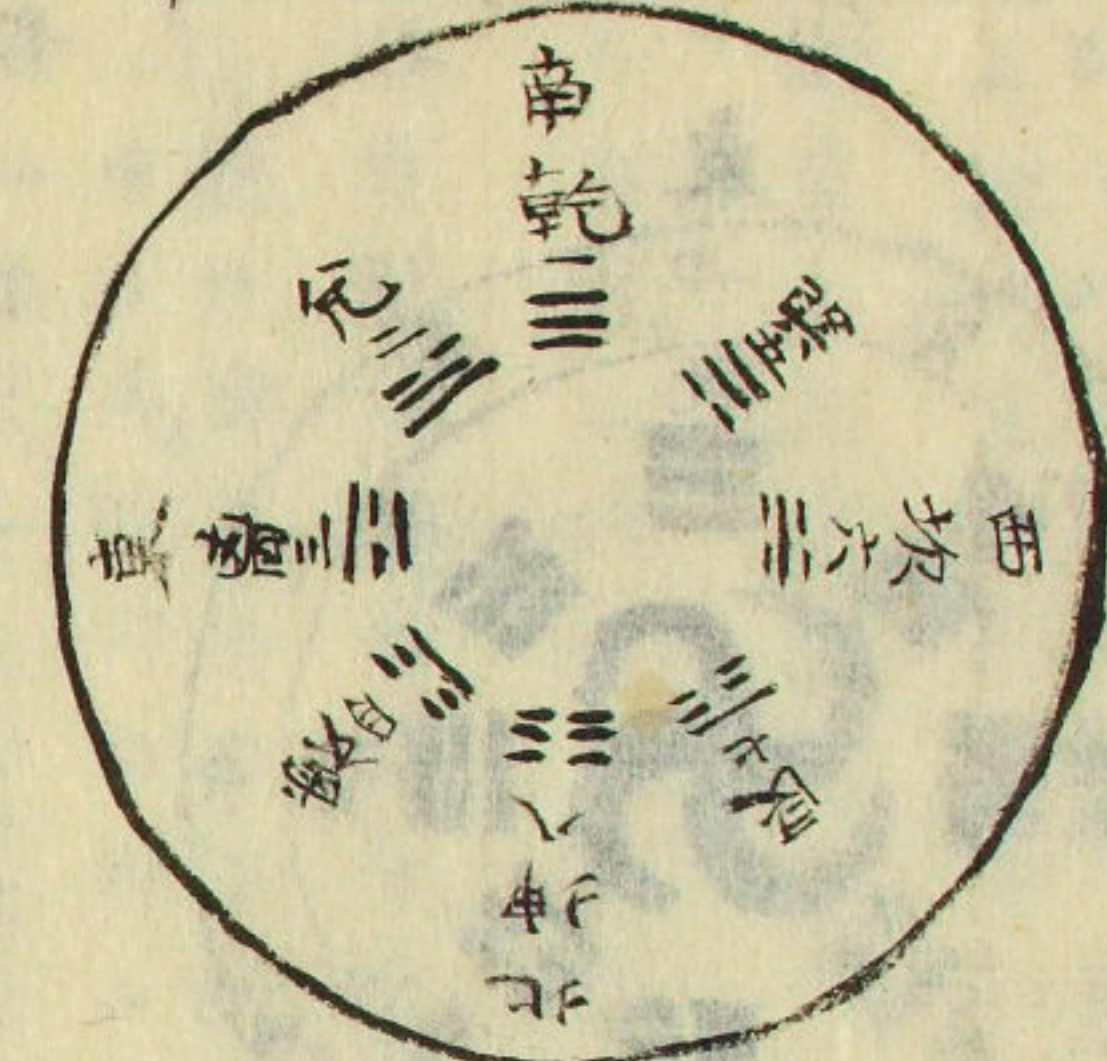
帝出乎震齊乎巽相見乎離致役乎坤說言乎兌戰乎乾勞乎坎

成言乎艮萬物出乎震震東方也齊乎巽巽東南也齊也者言萬
人南面而聽天下嚮明而治蓋取諸此也坤也者地也萬物皆致
養焉故曰致役乎坤兌正秋也萬物之所說也故曰說言乎兌戰
乎乾乾西北之卦也言會易相薄也坎者水也正北方之卦也勞
卦也萬物之所歸也故曰勞乎坎艮東北之卦也萬物之所成終
而所成始也故曰成言乎艮

此第六條大説卦傳小撮りて載せり但し萬物出乎震と云ふ
ふと古來より誤りて本文と建書し來れりは以下を注文と云
今こそ其意を得てふく分注し來れり是謂曰帝と
天日と云ふ其元毛詩大雅小皇矣上帝臨下有赫監觀四方
と有る上帝と正小日と指して云ふ易緯尚書緯ふと云
孔子曰帝者天祗也と有るや思ひ合せて辨ふべし記の註
疏小撮り其在之上賦謂之天因其生育之功謂之帝也と
云ふも然る言なり然るを彼邵雍朱熹らと始め帝者天之

てしを。朱熹が本義。及び啓蒙の。天地定位。章の首。符合を
 する由。伏義八卦方位圖。と云ふと出して。先天圖と云ふ

先天擬方位圖



と云ふ。其状のくは如くして。其
 説ふ。邵子曰。乾南坤北。巽東坎西
 震東北。兌東南。艮西南。艮西北。自
 震至乾為順。自巽至坤為逆と云
 ひ。此図もと華山の道士陳搏よ

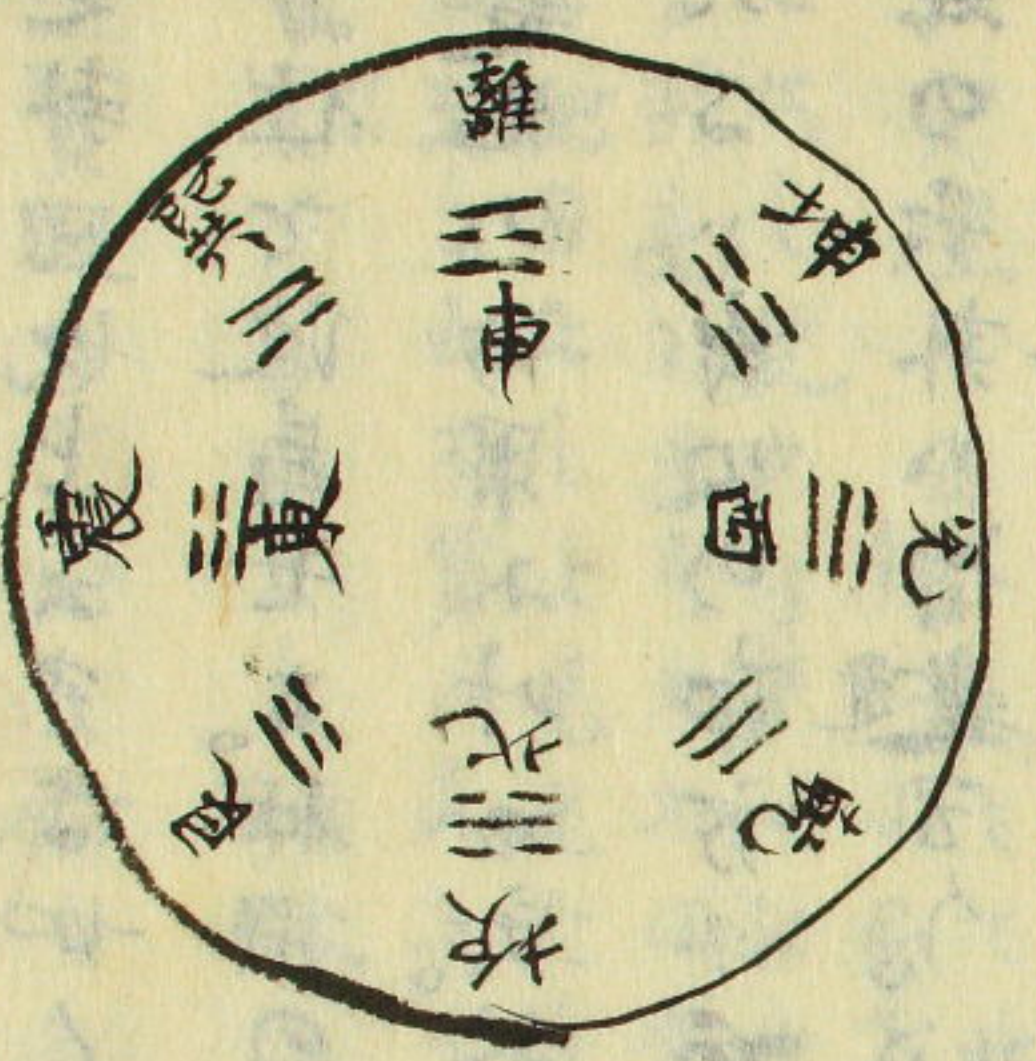
り出たる。邵雍まで傳來せる由。所謂先天之學也と
 言ふ。邵子とハ宋の邵雍と云ふ其傳來の次第を本義と
 陳搏李之才穆脩邵雍也と云へり此輩の傳て共
 宋史に見えて易學者流あふ中。陳搏を字
 と希美と云ひて道家の學ぶ者高き人あり 今此図を見

る。艮山兌澤の。其正位を得たれ。其餘の六卦ハ相對
 せぬ。故こそ天地定位の本文の合ふれ。其卦位はみあ甚く
 違ふ。其ハ已々考ふて前出せる。案ふ。此も後人の。天
 地定位云との古説を尊信する心を有ふなり。天地間の實
 理を問く。乾天を東方ある古義を識けらる偽作して。世を
 欺るるなり。されど其大謂はる後天之學。姤冒る卦位。其
 下其作れる趣を。乾天の君の象有るを。帝出乎震と云ふ條
 の。聖人南面而聽天下嚮明而治と云ふ語。思ひ合はる南
 方を配し。右を並ふへき兌。震を左。不取。左を並ふ。左を
 巽坎艮を。右を取れる故。かく講れる卦位の出来。其

拙き心小。眞の方位を悟り得ると思ふ物あら。然るる小我
 々^抄と為す。人の信まじき事を恐れず。伏羲氏の遺図小
 託て。密に人を擇^選ひて傳授せし物なり。此図もと傳授より
 あらと其作者のあらを陳^陳持れり。又若くハ陳^陳持より出^出し
 せよと託言ひて此を傳授し来れり。と云ふ徒^徒中^中の作
 者有らむも。以て近頃世もて嚙^嚙を。五要奇書と云ふ物の
 中^中の收^收たる。郭氏元經と云ふ物。羲皇卦篇と云ふ條あり。
 其條中^中。謂^謂ゆる方位を考ふるに。今出^出るる先天圖の方位
 と同^同しきハ。彼元經と云ふも此。此先天圖の偽造なりし以
 來^來此偽託ふる。是圖を彼元經に依りて作れり。其本末
 小^小詳^詳あらむ。彼元經と云ふもの晋の郭璞が著せる。其門人
 趙載と云ふもの注^注を依^依りて。注^注本^本文^文共

小同人の作と見ゆる。上^上の元^元の^の過^過たる五行説ありて郭
 璞が餘^餘の著述とて似もつ。ぬ拙^拙物^物なり。然^然れ^れと中^中の少^少く
 取^取捨^捨さ^さ事^事も無^無き^き。其^其の^の儲^儲また朱熹の本義。及び啟蒙小
 文王八卦方位圖と云ふと出して。後天圖とも稱する。其
 狀^狀の^のく^く此^此如^如く^くありて。此ハ本文
 小^小考^考れる。帝^帝出^出辛^辛震^震云^云しと云
 する條の注^注までを出して。其
 説^説不^不。邵^邵子^子曰^曰。易^易者^者一^一會^會一^一易^易之^之
 謂^謂也。農^農元^元始^始交^交者^者也。故^故當^當朝^朝夕^夕

後天擬方位圖



之^之位^位。坎^坎離^離交^交之^之極^極者^者也。故^故當^當子^子午^午之^之位^位。巽^巽艮^艮不^不交^交而^而會^會易^易。故^故當^當用^用中^中之^之偏^偏。乾^乾坤^坤純^純易^易。純^純會^會也。故^故當^當不^不用^用之^之位^位也。此文王

八卦乃入用之位。後天學也と云有り。此二書ある説と合
書で見抑右の帝出乎震云々の本文也。朱熹此此文王改易
伏羲之卦回也と云有り如く。心心小巧思思小旨旨有りて。太昊氏
此古方位で改易せる。杜撰の方位あるが故に。都て天地の
実理。造化の妙用。叶叶の交。然るは此卦位の中。小真此方位
を得たるハ。帝父の南方南あり。坎水の北方北あり。耳あり
る。其餘の六卦ハ皆皆違違有り。八卦の中中小只この坎離の位此
と催し北風来りて冷気冷と催催趣趣ともて何ある。愚人愚も知
り得得はきき氣行行ある故故元元みみままふふてて措措たるるはは後後へへし
其ハまづ乾天君父の卦卦也。西北北に維維ふ配し。坤地臣母の卦卦
と。南西の維維ふ配とる。天尊地卑會。易上下の方位或れし

上上小艮山と東北維維ふ配し。兌澤と西西に配配ををれを。山沢山の氣
通行行せせ。震雷と東東に配配し。巽風と東南維維ふ配ををれを。雷風
の氣激迫迫をを。互互ふ互生化の功功をを為為しと能能ハハ矣。此の如如きを
豈易易の實理と云云むむや。さて此杜撰妄作の中中小も乾乾と西北
の意意をを出出しし。攸攸めめるる第一一の曲曲事事あり。其餘餘も然然ししも深深く
巧巧めるる卦意意。非非をを天地の實理理に合合ふふや。合合ささるる者者みみももせ
てて慢慢ふふ配配當當ととししと見見ええたりり。乾乾の方位位
はは曲曲ありり。由由て第八八条条ふふをを見見べべし。柳柳姫姫冒冒るる右右の方
位位もも。渠渠がが當時時より。既既に三十年年も近近く其間間小小て孔子を
始め。聖賢賢の名名を得得し倫倫も多多く出出つつれれ。此此と實理理に合合さ
と悟悟るる者者れれ。古今今に儒者者らら會會易易家家あり。悉悉くく杜撰撰の欺
れれて。其著著せる書書等等ふ。天地の道理理を説説くくむむし言言へへ。此卦

位説に依る書めなき故小世小其毒と流せる事。莫小甚
大きなり。然るは今行ハる方位東の説事とも皆此卦位
事と為しめ西南震の向ひて西南震の向ひて西南震の向
ひて東南兌の事と為しめ西南兌の向ひて東北巽の事と
為しめ東北巽の向ひて西北艮の事と為しめ西北艮の向
ひて東乾の事と為しむる故小却りて其方神の崇りを受
て災禍不逢ふ者いと多う周易有るし以去古今の間小
此禍を受る人幾億万人と知らる此毒と流せる者姪冒
不非もして誰そ其も世俗庸人らも此方位を天地自然
其實義如く心得て執をイ又平巽とタツミと訓む類ひ
と其本訓の如く思ふまで人心中深きと古道小志有らむ
ふと此容易の如く思ふまじ非交然きと古道小志有らむ
人此卦位説の世小毒と為しむる然る小邵雍其喜ふと彼
如く此卦位説の世小毒と為しむる然る小邵雍其喜ふと彼
謂ゆる先天此卦位。これ謂ゆる後天の卦位。とも小取りて
並小甚深微妙の神理ある趣小説作せる人。是また何ちふ

愚昧なり。先天後天と云ふ説は由來も前条小引れる。朱熹
毛奇齡の如くあるれ。今更り云ふに。

先説。先天者伏羲所畫之易也。後天文王所演之易也。伏羲
之易初無文字。只有一圖。以寓其象數。而天地万物之理。會易
始終之變。其焉。文王之易。即今之周易。而孔子所為作傳者。是
也。伏羲在前。文王在後。必欲知聖人作易之本。則當考伏羲之
畫。若只欲知今易書文義。則但求文王之經。孔子之傳足矣。而
者初不相妨。而亦不可以相雜也。と云ふなり。此を引く
めて抄をり此餘小邵朱ら小西者相妨小此微妙の道理
有る趣小演布とる思説と小諸書小多く所見たれと煩
水を今ハ然れども先天の卦位を是と為るときハ。後天の
卦位を非と為らハ有るら。更後天の卦位を是と為時ハ

先天の卦位と非と為と有るらる。而者初不相妨と云ふ道理也。絶て无き物をや。此は文王孔子また作るとも。予が此説を易ふる事能はしむ。況て邵雍朱熹らが倫とや。此は古今の漢學者らに甚く尊信を有る。姫昌が卦位とし、而く多の故考し若さ人者らむ。予は右の説とも論じ、直ちて問ひ試みたる。予は其問を候つ者ありし。抑八卦の奉信をなく。尊重すべき物ある事。その卦を各々其々の真象を包藏し。ま多各々其こふ。終古不動りたる。方隅の位所。自然不定りて。三方の實理。籠罩せける事。然れ。此方位也。凡人の知力と以て。替るるらぬ定位あること。山に走る獸

と海を養れむ。海は游ぐ魚を。山は畜れざると同じ道理なり。然るを謂ゆる先天後天の卦位も。姫昌の言はれ。邵雍の言はれ。其才覚をもて。杜撰に立たる方位ある。何の嗚呼あり。或る野為る。今世に家相方位と称する。徒に言ふ。井を掘り。歳を建する。辰巳の間と戌亥の間とを吉とし。丑寅の間と未申の間とを凶とする。由云ふを。其説は趣を。謂ゆる後天学の辰巳の巽。戌亥の乾。丑寅の艮。未申の坤を配せる方位也。空理を証會せ。証説等ある。往々その吉凶の応驗あり。但し此事のみならず。謂ゆる家相方位と説く。徒に言ふ。其の言ふ事ある。其説長り。礼を此に。此は其後天方位の。實に其野を得たる故に。非也。其説こそ文王の九意

と以て立たし卦位其証會説おれ然る応驗の實あるハ。太
昊其神意を以て。觀し定め一方象の無窮小易ら次西北イヌキ
良山東南メツミ小兌澤カミ交小通氣あるが故小井藏及ひ諸事小吉
く西南ラシ小震雷東北ウシ小巽風互小激薄するが故小井藏及ひ
諸事小凶シされり。此道理をわわ密ミ小云わ小もし其辰巳
小井藏と造らて凶兵風撓散ハ其牙あるが上小相対する乾天
其威又厥とて凶あるを成ハ其牙あるが上小相対する乾天
位平を和して土を積ハ其土を掘るが上小相対する巽風の
氣小散されて凶あるを成ハ其土を掘るが上小相対する巽風の
るは戌亥其偶を元ハ其辰巳の兌澤より悦潤其氣通る故小吉
水原あるが上小辰巳の兌澤より悦潤其氣通る故小吉
く辰巳其偶を元ハ其辰巳の兌澤より悦潤其氣通る故小吉
小戌亥の良山より生成の氣通る故小吉
また未申小井藏を造るが上小相対する巽風の位
野小て元より撓散する卦徳あるが上小相対する未申其

震雷より激迫して凶未申の陽を震雷其位野小て元を
其振動其卦徳あるが上小相対する丑寅の巽風より撓散
其て凶なりもし後天学其卦位を以て云ふときは丑寅を
良山あるが上小相対する未申より坤地其助あり必吉
あるを未申の坤地あるが上小相対する丑寅より良山
其祐あり必吉あるが上小相対する丑寅より良山
其卦位ある故小其理小合ざる事斯く何をや人女立た
せる先入の病を忘れて熟るが此謂を思ふが誠や八卦
其真方位も幽冥の事トなり小大物主神即稱ゆる太昊
氏の。其徳天地小通して。變通方カある。萬事の終始を窮めて。
庶品其自然小協カひ。其明も月小並へる神真なる。天相其
錫する河浴の真敷小本つき。仰きて象を天小觀し。俯して
法を地小察し。身小とり物を取て。定め給する事ある故
小。其理終古小動くことなく。宇宙の間小脈論するが故に。

右に如く應驗あり。何れ忌みしき神慮あらざるや。然れども此
兆を一區別をれども其理も九億兆に別れておのづから相離
れを一方解石と云ふ石の其質異なる方形あるを何れ碎く
と云ふ皆方解石と云ふ石の其質異なる方形あるを何れ碎く
以て是を見らば其細粉のみ方形を存せしむる或人誰して言
ふが如く是を見るに何れ奇しむるや。後天に卦位を天地の實理に合せらば杜撰ありと云ふ事
謂ゆる聖言を侮るに非ざるや。答ふ吾豈真に聖人を侮らむ
や。彼姫昌を真聖と非ざる擬聖なり。抑聖といふ孔子の語にも
所謂聖人者徳合於天地。變通無方。窮萬事終始。協庶品之自
然。敷其大道。而遂成情性。明並日月。化行若神。下民不知其徳。
觀者不識其鄰。此謂聖人也。と言ふなり。説にも多かれと野快

凡れを今ハ目易き史記の周本紀を始め。姫昌が事蹟を取
一説を引出たり。並んで。此聖の古説不律し察よ。此る聖徳いつこふり有る。
此を其傳記を引出るまでも無く。今論する方位をもて言
むるも。天地造化の變通を識らむ。其説庶品の自然に協を
受。万物の情性不通を。然る人の争ひ萬事終始子竊め
む。然るを豈明日月不並ふと云むや。豈徳天地不合を云
むや。予是をもて真聖と非ざる擬聖なりと言ふは。抱朴
子行
品。指細善。以取信。陰狹毒。而無親者。若人也。雖言巧。而行違
實履。濁而假清。有佞人也。向姫昌。飽く此。不合。勇りそを
真。肯其。訟を。措。め。括。骨。を。藏。め。紂。王。が。炮。烙。の。刑。を。諫。め。た。る
類。く。細。善。を。措。て。信。を。取。れ。り。其。言。を。巧。ありし。う。と。其
行。ひ。く。實。不。違。ひ。濁。を。履。て。清。を。假。り。陰。を。毒。を。使。み。て。親。を
く。其。子。姫。發。の。遺。言。して。其。君。紂。王。と。亡。した。り。何。れ。姦。人。佞

人ありやや猶委しくた第八條及び赤縣太古傳み然る小
太是氏傳三層由來記西籍慨論の論ふを見る傳し然る小
俗は漢學者とも孔子は姫冒と聖と稱せる言も有や以て
煩ふ聖人そと畏惑ひて其言行は當否とも糺は文信じ。總
て周秦は煩より。聖人と稱し來孔は徒の言行をば。是聖語
あり是聖行ありと云ふ。田鼠は描色を聞れる如く。屈故
拜伏するハ。何ちふ愚昧をや。凡古今は漢學者流は其學を
拙劣未練あること。熟く思ふ。かの聖言聖行と云ふ。聖
は名不威されて。その言行は當否を。糺し習ふるに依る
事なり。殊に孔子の姫冒と聖と稱せし時世は。姫たりし
其時王と聖とも神とも稱する人あり然るに其説は
奉りて説は如く聖は本説を知りて人あり然るに其説は

叶を吟る文王をいふで真は聖人と思えむ世は時世の増
たる言はれはこと論ひれし。また假令孔子は聖人と思
ふは。心も有れ其言を頼みて一向に畏れず。先づ心
を他も奪はれず。其て愚昧は心なり。然る世俗の學者ら
は如く。聖の真擬を糺さず。その言行の當否を。諱めを。
雷同して信する事を得為る。然れを聖語を傳るとも何とも
云ふ。凡て漢籍は聖人と云ふ。有るに委しき説は。諸書は
參攷して。赤縣太古傳は聖人の跡を尋ねるを。見し。
⑦大衍之數五十。其用四十有九。分而為二。以象兩。掛一以象三。揲
之以四。以象四時。歸奇於扚。以象閏。五歲再閏。故再扚而後掛。是
故四營而成易。十有八變而成卦。八卦而小成。引而伸之。觸類而
長之。天下之能事畢矣。

此第七條は繫辭傳不出て。立卦筮儀は古説あるが。其揲策の趣は。孔穎達が正義に。每一爻有三變。謂初一揲不五則九。第二揲不四則八。第三揲亦不四則八。若三者俱多為老金。俱少為老易。兩少一多為少金。兩多一少為少易。三變既畢乃定。一爻朱熹の本義に。三變成爻。十八變則成六爻也。九變而成三畫。得内卦已成六爻。而祝爻之變。與不變。以為動靜。則一卦可變而為六十四卦。以定吉凶。凡四十九十六卦也。鄭玄王弼より以來の諸注は悉く載して。十有八變の筮法と稱し人普しく信用せりと。傍ら・点を施せる六字を。姪昌が摺入りて。其用四十有九と有るも。殷易の四十五策ありしを。

彼が杜撰を増たる数ある事あり。本編も委く論ずるが如し。○はて本書に。此文と下文との間。乾之策云と章を起して。當萬物之數也と云きて。四十五字の文有りと。其ハ姪昌が十八變筮の策数を通計せるふて。論ふも足らざる章あり。一向に捨てるし出さば。此は已に十八變筮を以足りむと捨たる人。信する筈に。或人問ふ。四十有九策。十有八變の筮法を。古來より其法ふて。人より聊か異義こそ有れ。總て偽法なりと。捨たる人々有る事あり。然るを前此に絶て筮し得まじき筮法なりと云ふるを。何等の説ありて言ふ事ぞ。答ふ。其謂ゆる古法を。其古法も非也。姪昌が新法

あること。四十九策を用ゐる。更ふ論ひ無き事なり。既に引たる通志玉海ふとに載せし古説。周易用四十五策周易用四十九策と有る。斯て其古説中。以象三と其字を換入し。再扣而後卦と云ふ。重卦法を示さる語ある。左右兩策を撰りし奇と指間を撰り。後。掛る義。小翻案して掛り作り。一文三變。其いと。煩しき擬筮法を作り。且下文。十有八變而成卦。ち。偽文を以る。小換入せり。此偽筮法。其撰著する。漢儒以來。其有まど皆人。其知れ。然るに其筮法をも。四十九策を以て。其法。如く行ふ。過不及の數出來て。真筮を得がなき物なり。其を此筮法。不從事せる人。あがら。真筮違富と云ふ。

人其説ふ。夫昔を撰りて得る所。其策。四を奇とし。八を偶とす。然る。小四十九策。ふて。初變。小左手の策と撰りて。一を得れ。必。右の策より。三を得て。掛一。其策と三合。あて。五策の奇數と成る。此奇數を得る。必。一あり。今云。掛一。依りて。右手。其一策を。小指。其間。小換め。ると。云。其り。下。其。小。其。或。ハ。二を得れ。必。右の策より。二を得て。掛一の策と三合。あて。五策。其奇と成る。此奇數を得る。或。ハ。三を得れ。必。右の策より。一を得て。掛一の策と三合して。五策の奇數と成る。其奇數と得る。四を得れ。必。右の策より。四を得て。掛一。其策と三合して。始めて。九策の偶數と成る。今云。上。其。四を奇とし。八を偶とす。と云。此。其。

五策を奇と云ひ九策を偶と云ふことと曰く四十九策を用ひて其奇偶を断るる説等の中にも朱熹の説は一變四餘之策左一則右必三左二則右亦二左三則右必一左四則右變四通掛一之策不五則九五以一其四而為奇九以兩其四而為偶奇者三偶者一也と見奇数と成るとの三。偶数と有るふ當りて云ふ説あり

成るも此一。此九奇偶三増倍の扁倚あり。豈これと公正の立法と云むや。と言ふるふて知れし。扁倚ありが故に試し、小春を執りて四象の過不及を驗する小奇数み出ること甚多く偶数み出ること十中の三み有りて三奇の老易二奇一偶み少金枝の二十反出ること二偶一奇み少易み出ること十反み過も三偶み老金出ること僅み一二反み是を以て乾卦み出ること常多く坤卦の出すこと甚希なり然れハ其所屬此卦の出すみ過不及の事推て知るを今み易學者流にみ義なきを論ふ不足なり此四十九策と定めし姤冒を更なり此を傳せたる孔丘氏も此の心著さりし然るも此人四十九策み非を辨せたる何ちふ事なり

説を宜しとせ。又別九と八の誤字あり。と言に説を立て。其言ふ四十八策み用数おてえ。初變ふ左策を撰りて一と得れり。必右み策より二と得て。掛一の策と三合して四策み奇数と成る。これ奇数を得或ハ二と得れた。必右み策より一と得て。掛一の策と三合して。四策の奇数と成る。奇数を得るは或ハ三と得れた。必右み策より四と得て。掛一の策と三合志ふ。八策の偶数と成る。これ偶数を得或は四と得れた。右の策より三と得て。掛一の策と三合志て。八策の偶数と成る。これ偶数を得是奇数と成るもの二。偶数と成るも此二あり。奇偶等分ふ志て。十有八變中小隻半の呪

策あく。毫髪其支吾あく。真小至正の筮法形りとも云り。前説
と共小其門人松井暉星と云ふ人其著此古今の易学者
せる象爻辞占と云ふ物小見え多り。
流の説等其申ふハ。卓スグレ然たる説ありと。仍よ十有八變の先入。
そ其因疾と成り了。彼四字の摺入を更ぬり。掛字を卦字に
論字ある事をも辨別小かく。臆説を工夫して。本の煩
勞あけ筮法に従つ。無證ハ其新説ハあも立たりん。
其ハ此本書ハ四十八策の本拠を云る説ハ古傳云とて。夏
小は三十六策を用ひ。般ハ四十八策ハ用ひと。四十八策
を勿論ハ三十三策ハ用ひて。筮をべし。獨ハ四十九策ハ用ひて。
斯然として。筮をべし。然ハ此ハ上ハ引ハたる。通
大古書小絶て。證文有こと。然ハ此ハ上ハ引ハたる。通
志及ひ王海ハと云ふ。四十五策と有る由を。途ハ小ハきハりハて。聞ハ過
ある。或を杜撰ハりハし。其道ハ小ハ無ハ上ハの重ハき事ハあり。
書名を本ハ奉ハりハし。其道ハ小ハ無ハ上ハの重ハき事ハあり。

小然る臆説をし。儲ハあハり新説を立つ。其筮法の字類
と為し。傳ハき事ハあり。儲ハあハり新説を立つ。其筮法の字類
く。其於ハ近ハ遠ハあして。急卒ハ其事ハ小ハ施用ハ難ハき事ハと。自知せ
るが故に。十八變ハ其策ハを立ハる長ハき間ハ小ハハ。自然ハ小ハ神氣ハ一致
を。惑乱ハ其想ハ其策ハを立ハる長ハき間ハ小ハハ。自然ハ小ハ神氣ハ一致
圓子として表裡小。初二三四五上の字を刻み。朱と藍とを刺
れると十八箇作り。そを擲て。本卦及び之卦を察むるコトを
しも。吾も用ひ門人らハ小ハと傳へて。そ有る。此を必ハあハけハ擲
錢。まゝ其棋法ハをりや思著る。其回子ト云ハもハの或
を密ハ小ハ見ハたる事ハ向ハ然ハして。彼擲錢法ハ其類ハをハ甚ハくハ所ハ以
て大功ハ至ハ極ハは。天命と請ひ。鬼神を驚ハりハし。奉ハる事ハ小ハ見ハ厭ハ玩
具ハ小ハ等ハし。其野為ハして。不敬ハ侮ハ慢ハは。至ハれハり。不敬ハ無ハ礼ハあり。時
鬼ハ神ハ感ハ格ハを。其鬼格ハを。其卦忘ハる。何ハ其用を。其卦忘ハる。何ハ其用を。

さむ聖人は是る為にこそ著筮法を立給ふれ其他種と
け設法ありと言ふと都て取る不足と門人その遺
説を記し依て何なる事なり乎を以て是を視れ孔子
更なり十有八變の筮法も見戯も等しくこそ思はるれ
と此達富及び其門人暉星をのり易眼を具し替はるは
疑判断め法を辨り知らる人たまたあくぬむ
就て案ふに近く寶曆の世極ふ平澤常矩と云ふ人あり此
人好言小繫辭傳ある十八變の筮法を孔子の言と為れと
着來 著來 了に變營教次わして俄頃辨難く急卒の陰いと便
利から也且注語錯乱して聖人の全文小非を疑えし者
あり次小擲錢法心易法も多取捨あくて有傍のらる今や
年來これと試して其一定拠る不足なる事を悟る故も古
法を斟酌して自己の發明を加ふ別れ一家法を立つ惟

易法活法小契ひ。應驗の過らき小頼る。世は易學者或ハ予
を扣きて蜂起すとも。是も答ふるに詞を以ては直直小答を
立て其心驗を示しむと言ふなり。此尤其著せよト筮經驗と
變の筮法を省破せる見識の高きこと古今小類
れく是また易學者流中法一偉人あり有りる斯も其筮
法小五十著を執り其一策を取りて格の中刻小置て虚一
小象なり。四十九策を手の信信せて。中分ちて二と為し。右は
一分を格の右に大刻小置き。其中法一策を取りて左の小
指間小掛け。左手の一分を。右手を以て四々四々と撰り。八
除して其奇策一を乾とし。二字兌とし。餘を之小劬ひて是
を上卦とし。再總数を合せて。前式の如く。其奇策を視て下

卦と一其爻をとりて復綜合ありて三三と撰え六
除きて奇策の数を以て初より上爻までの六位に當て一
爻變を依り。是世に謂ゆる畧筮法なり。此は其著るせる
の不出せり然して其下筮經驗あり初二三の卦を變を
返さく論より松井暉星の此筮法を破れり説は是爻法
にて一生涯に幾千萬筮を為すと雖も一卦として不
變の卦に遇ふこと少く加つ固より易道を變化を尚む事
なり故に二爻變も有り又三爻四爻五爻も有り六爻皆
變の卦も有り是易の爻易たる所以あり然るに此
畧筮ありて卦ごとく必を一爻變り局れる法ありを以て
不變の卦と二爻以上の變と云ふ者も絶て有らば然し按
ふれば此は彼邦にて感動象數易法の取扱ひを一爻變り法
ありけるを論じて擲法を轉じ其や我邦に傳りしを著
筮に移し傳して彼邦に感動易の遺法あり然れども上
卦より卦を起し起る是感動易の遺法あり然れども上
一人有りて其法を秘して下卦より先づ卦を説くは法
為たりが即ち今此俗筮式ありと云ふるも實に然る事なり

論ひ前柳是後の然る筮法どもた。凡て觀易の眼高より爻。
又論ひし柳是後の然る筮法どもた。凡て觀易の眼高より爻。
姫昌の偽文の欺れて其や拙正参考を事を知らば強ひ
て努めり荷ひ出せる愚法等小て。太見神聖の古面目小て。
都て契りぬ事ありて一切に掃除ありて行ひ用ふる事あり
是○再問ふ十八變の筮法。實に偽法ありハ古くも史蘇君
平の如き筮聖の出産も非ず。然るに渠等が如く萬變に
応接する易者の出たるも如何そや。尋乃答りむと欲ふ小
傍に活田篤道有り。顧みて汝は答せよと言ふた。篤道云
く。師は石法如く筮法は古式を論ずれば在る。また恒に我
等不誨言給へる説有れば。筮義は然しも泥まじき謂有り。

然るに三千年の近く、真式を泯没せし故也。謂ゆる十有八
變の偽筮及び擲錢を始め、諸般の筮儀起れり。其を用る
倫各を其占判の奇中正応ありて、史蘇辛廖と相並ふ法き徒
と。和漢古今も少らぬ也。必しも筮儀の真偽を依て占判
小淑慝あるも非矣。幽の神明の祐助を賜する故也。偶不
正應有るあり。然も有るも前件々のこと師の考記をりし
類をいさ其真式を布の見やるや古神易を論ひ頭をりし
為るを筮義を然しも泥むをき非ざるを然し。頭をりし
ふ非ざるも其由いふると言ふに。誰のまれば此道也。心を潭め
力を竭して、熟く習慣せる人々。此道を始め給する太昊氏
一跡扶桑大帝。また並立て、事成し給する泰一小子。一跡

東華大神。及び天地雷風水火山澤の八神。また天神地祇列
仙諸靈の降臨照鑒せし坐也。誠意た小道に当らむ占判
小正応有むこと。何れ疑えむ。今拳たる諸神の名及び其功
なり説辨をりし。抑ゆる至聖の人を。腹中既も一部の易
を見ても知る所し。抑ゆる至聖の人を。腹中既も一部の易
有りて。四千九百六變の卦也。我々丹田方寸の間も繫辭を
孔也。其耳目小觸も其思慮も感する所也。侍て天下の故も
通して。一と去て又を生し。卦を立べらぬ物なく。疾りも
去て速ふ。行きて至れ也。何れも筮義を拘るも是らむ。
實もハ機も臨み變に應じて。環觀活用する中も。筮法は真
式を見ゆる事なり。但し已篤道は唯も此道は一隅を聞
き此文の一斑を窺する耳こそ有る然

る位域をしも九天の上を仰き九淵の下を臨む如く此
と今より後習慣年々踏え積熟功を経たらむ今此仰
き窺ふ物や卑く今此臨を親る物や、浅らむ事を負
気おくれと庶幾ひて、傍聞を憚らむらく言拳おさふ
も片て師お上ふ委く辨言給へる如く。天地此間を活く
活き。生とし生る物の。尽く各々一生本命の卦あり。年々
卦あり。節々の卦あり。細く推し精く求むる時を。一日一時
一刻の卦あり。是足隸備して。造次も離れず。顛沛も去ら
ず。昭合密者して。火も燥あり水も温有るが如く。皆其性命
と成る事也。即て天極の坐を太祖參神の賦與し給ふ所
あり。是を謂ゆる天命あり。此は三神の由来及び天命の本
義を我が師が諸書に依りて始
るはと今も人も善く知れらむことし然れを常の能く

此天命を知りて。其時處位に即て。またよく其天命を奉じ
て之を率ひ。之を批て旨て悖逆乖違をける者や成人と云
ひ其否ざる者や小人と云ふ。是を以て大の爲と有り。行
ふ事有るに非けれむ。著々操牙を盡して。問筮する事を
用ひきてして。之を我り天命に求むれ。替疑の方備を定
む。尚占道虧る事れく。儼然として違はらむに。確乎とし
て扱べらむ。華々為らむと有り。行ふ事あり毎に問筮し
て。以て真正の徳を喪ひ。卦を答を招くむや。此を世に周
易学者及び日家者流おどの。能く知る所なればあり。
易之興也其當殷之末世。周之盛徳。邪當文王與紂之事。邪。是故

其辞危危者使平易者使傾其道甚大百物不廢懼以終始其要
无咎此之謂易之道也。

此第八條也。繫辭傳の採りて載せり。是謂由る易ハ周易也
云ふ。三易を通して云ふるハ非也。抑周易が興るは姫昌
が羨里の囚たれし間の事ある由也。既論ふ如く諦ある
事あるに。此文のらく分明あらむ云ふるも。何ある由あら
むと言ふに。其羨里の拘てれて作きりと云ふ事。その実事
あり有れと其史遷が謂ふは陰謀の一術あり有る也。周
文武が殷の天下を奪ふに就てハ陰謀術計多しありし事史
記が周本紀殷本紀及び呂望姫且らう世家が始め其餘の
書にも弘く昭示し考えて赤縣太古傳春秋命歴叙致其未
三層由來記西籍概論ありた委く論ずるを見ゆし。

此に至りては右の如くと文籍ハ其密説をも著せられたる
盛ありし間あり。姫昌が羨里の囚たれし時其作と題し云
事也。憚れり故に然とかく引きて放たぬ文法を以て。其作
者ハ不明あらぬ趣ハ云ふるなり。但し繫辭傳ハ周易の末
此文有るは何時に思ふ人も有らん其此傳ハ載るは記
事なる當時ハ傳へられたる諸説を聚めし物なれり故に
文外ハ易之興也其於中五乎作易者其有愛患邪然
其類其衰世之意邪あり様ハ云ふ諸とも多うり然
と書名ハ周易と題する上ハ殷の末世周易盛徳ある時と
指し。當文王與紂之事邪と云ふ礼ハ其作者ハ姫昌を除き
て誰り有らむと。誰れも見取らるる文なり。其信ありも其
最辞が危きや以て也。逆意を含めり姫昌の作と著明し知

らる事ふこと。然るや伊藤長風が説易私記に右の語等
荀子史遷及緯書亦有其説又中所謂如王用亨于岐山箕子
之明夷等此武王克商以後之事故馬融陸績等諸儒以為周
公作爻辭自是以來其説一定朱子雖知其無明批亦姑依其
說後世學者一遵其説而不知其有不可詳者焉と云ふるを
最又其辭や姫昌父子の作と為るを其文中の逆意いと明
く見えて已の憲章を道に臭汚と成るる故あり儒を以
て家業を立たる人其心配りて然らば其象爻の辭も姫昌
の逆意を以し扶める證文に著明にも有やと言む。其七
上下篇の乾より未濟に至る六十四卦の辭も一卦も其意
を含まぬを無きと其を逐一に論むを煩ひし。今その尤き
を云ふむ。まつ八卦の方位を錯置せること。其逆謀は張
本小為むと結搆なり。是より古く連山易の艮が首と
為し坤藏易の坤を首と為すと

た有れと其の卦頌を云ふ時其言にこそ有れ其方位を改
易せしれを非文姫昌の易の卦頌を伏羲の乾坤震巽坎
離艮兌を用ひたれと其方位をいひて其由を彼國圖と
前以余の云ふごとく改めしあり。いぞ其由を彼國圖と
檢察する小。殷王が都を冀州と云ふ地ありて。赤縣州の總國
を取らざり。丑寅巽の方位に在りて。謂ゆる孟津の大川。其
東南西を廻り。姫昌が本國岐周の地を。雍州と云ふ域内を
て。彼總國の取りては。戌亥艮の方位に在りて。孟津の南を
る豫州と云ふ辺までを領せり。然るに己が領する豫雍の
西南より。冀州の東北を逆をむ事也。古説不謂也と神明之
舎を犯す怖あり。東北の方を神明の舎と云ひて古く畏
る事種々の書より證を引きて赤
縣太古傳小委しく云ふ。の於世小普く忌み畏る。鬼門の方
を此に今更る云ふに。

あれハ。然る大事を奪ふに宜し非とも。其從類の殆多む
事々思ひて。其本国の成亥の乾を配し。設地の丑寅の艮を
配して。乾の天位より。艮の山を厭勝する義の翻案して。民
心を安むる術計の有りたる。其ハ既濟の九三の高宗伐
鬼方三年克之。小人勿用。之
云ひ未済の九四の震用伐鬼方。三年有賞。干大國。又辭也
る也。以て其心配を察する。鬼方を即鬼門とて丑寅の
り高宗とは殷代中其の主として此代の其鬼方を伐て功を
遅らまし事も鑿みたる大人より斯如くあれを成て小人
を用ふるは古の勿きと誠めたる所なり。震用伐鬼方。云々も其
義にて震の古方位ゆて未申あり。殷都より鬼方に向ふ
て其都未申の在るが故なり。語り傳ふし古説を周の
擬方位の轉語し。而るを載せる文外。然れを舊説の震を
進と叙せる説を兼り予が見たる注書にも。此鬼方は
論ふ所を解し得て何れと云ふ所説にも有り。と云々
説あり。し。さて姫昌が乾卦の象辭の乾元亨利貞と

係たる也。爰里の拘囚と懸れて。乾位の處する用意は語子
と。其文意は朱熹の本義の元大也。亨通也。利宜也。貞正而固
也。文王以為。執道大通而至正。故當得大通。而必利在正固。然
後可以保其終也。と説たるが如し。伊藤長胤が言ひ。王輔嗣
之意。今作四德。至朱子始解。曰。大通而利在正固。則固得易象
之本意。而今古之卓見也。と云ふ所然る言れり。又其説文
のト問也。以下見。見以為。賛と有りて神の賛してト問を成
し。純固正一。其問に従ひ。その卦象を持重する義の用と
なり。斯レ此卦の象物も龍河なり。故も其子姪也。六の六
爻の辭を作り龍をもて。其父姫昌と。兄姫發と。自吾と。三
人の履歷も以喻して。その占を示し。其の乾元亨利貞記に
乾元亨利貞道之用也。文王以隆興始。鄭玄云。文王以德。於
乾之隆盛。謂其龍德。

長人長人以始霸以始霸四方四方序錄序錄著卦著卦科合謀科合謀序錄序錄王錄王錄著卦著卦為六十為六十

文王用其不倦文王用其不倦武發修其質素武發修其質素周公用其節序周公用其節序三聖首乾德三聖首乾德各

就乾元亨利貞遺就乾元亨利貞遺夕惕若厲懼後戒夕惕若厲懼後戒文王自朝至於日昃文王自朝至於日昃不遑不遑

而行而行之不敢有知是乾之質素之不敢有知是乾之質素周公制周公制禮作樂禮作樂先文武之業先文武之業是乾之節序也是乾之節序也有之有之象辭象辭大吏大吏

其父辭其父辭合七考合七考牙牙知知了了めめ此乾元序制記此乾元序制記と云と云古古きき緯緯

書書ふふてて全全書書傳傳たたりり武武英英其其たた初初九九潛潛龍龍勿勿用用ととてて姬姬昌昌ののめめ

羨羨里里をを遯遯れれてて本本固固をを潛潛ままりり時時をを待待てて龍龍德德をを用用ふふるる事事をを

ききをを言言ひひ九九二二見見龍龍在在田田利利見見大大人人ととてて六六韜韜ままたた史史記記のの文文

王將王將田田史史編編布布卜卜曰曰馬馬於於滑滑陽陽將將大大得得焉焉とと云云牙牙にに果果してして

呂望呂望をを得得たたりりとと有有るる如如くく呂望呂望始始めめてて謂謂ゆゆるる在在上上にに大大人人

姬昌姬昌顧顧養養をを受受たたるるをを言言ひひ見龍を呂望を指さる田は合

末末のの注注ををみみぬぬれれりり九九三三君君子子終終日日乾乾之之夕夕惕惕若若厲厲无无咎咎とと

九九序序制制記記のの文文王王用用其其不不倦倦とと云云牙牙をを如如くく恒恒小小健健とと自自疆疆

してして息息をを惕惕若若とと恐恐懼懼をを為為しし時時をを不不厲厲りり礼礼をを事事をを拳拳をを唯唯

其其心心構構をを勿勿しし生生涯涯ををああくくてて死死ままるるをを言言牙牙りり此は史記の

伯伯夷夷乃乃陰陰修修德德行行善善諸諸侯侯多多叛叛紂紂而而往往歸歸西西伯伯伯伯夷夷大大紂紂由由

是是稍稍失失權權重重とと向向りり論論衡衡のの周周取取般般之之時時太太公公陰陰謀謀食食小小兒兒丹丹

教教をを般般亡亡兵兵到到牧牧野野とと向向りり片片をを九九四四或或躍躍在在淵淵无无咎咎ととてて史史

記記をを見見ええたるたる如如くく姬姬發發りり其其父父のの遺遺意意ををつつききてて三三年年のの服服

畢畢るる後後小小姬姬昌昌がが本本主主をを車車にに載載せせてて自自事事ををななすするる心心をを

そそりりてて太太子子發發とと稱稱しし紂紂をを討討むむとと師師をを起起しし或或はは躍躍ららむむとと

欲されど。いふ天命至り更と。龍は淵より潜む如く帰りし
言ひ。其九年。尚書偽古文泰誓。孔安國傳。初受命之年。
我紂之心。諸侯僉同。乃退。以示弱。云。是初度。の出師。机
を師。卦。六五。長子帥師。弟子與。尸。真。山。云。是。此。義
を。傲。たる。れり。然。て。此。後。十。有。三。年。と。云。ひ。り。年。不。再。
師。を。起。して。本。意。を。遂。たり。下。の。九。五。の。云。ふ。所。是。あり。九。五。
飛龍在天。利見大人。とは。飛龍。天。に。在。る。時。を。待。得。て。謂
ゆる。在。下。の。大人。呂望。を。用。ひ。て。遂。ふ。る。君。王。を。滅。して。父
祖。の。素。意。を。修。め。畢。たる。と。言。ふ。是。を。以。て。序。制。記。す。武。發。修
其。質。素。と。云。ふ。り。大人。と。ハ。も。在。上。君。王。の。稱。ある。を。後。了
言。と。為。れり。九。二。の。大人。と。姫。昌。を。さ。し。九。五。の。大人。と。呂望
を。指。す。と。是。を。辨。ひ。知。る。を。朱。熹。が。注。す。九。二。の。大人。と。
在。下。の。大人。と。為。し。九。五。の。大人。と。次。に。上。九。元。龍。有。悔。と。云。
在。上。の。大人。と。為。る。を。違。り。り。

姫且己が上を去りて。兄姫發が死して後。其姫の成
王誦と云ひし八歳の兒を補佐する由りて。王事を行ひ。そ
の位を奪むと欲する。其兄弟の輩。か。召。公。奭。を。始。め。
其。意。を。知。れ。る。故。に。事。を。遂。ら。ず。悔。を。為。さ。る。と。云。ひ。姫。且。己。が
知。り。て。不。安。を。思。ふ。る。を。管。叔。蔡。叔。の。み。に。非。き。姫。奭。の。賢。き
心。も。忌。恐。れ。し。と。燕。の。世。家。も。魯。の。世。家。を。見。通。して。知
依。を。疑。ふ。人。あり。む。や。用。九。見。羣。龍。无。首。吉。と。云。ふ。に。仇
せ。し。殷。の。武。庚。及。び。我。の。兄。弟。と。も。誅。して。我。身。の。事。无。り
し。を。言。ひ。後。終。に。其。意。を。轉。して。文。武。の。道。の。節。序。を。て。文。辭
を。依。れ。り。是。を。以。て。序。制。記。す。周。公。用。其。節。序。と。云。ふ。り。上。九
龍。を。其。身。の。功。し。用。九。の。羣。龍。を。即。ち。か。の。管。叔。蔡。叔。また。紂。の。子。武。庚。祿。父。と。不。論。す。た。云。は。て。坤。卦。の
○四二

象辞小。坤元亨利貞。君子有攸往。先迷後利。西南得朋。東北喪朋。安貞吉。と云ふ。其擬方位小。坤を西南に配する故也。此方小を得。朋と云ひ。東北に殷の都所在する方にて。鬼方あり。故に喪。朋と云ひ。此卦を得てを殷に難くはれ。貞小安と云ふ。と云ふ。次と云ふ。あり。本書右の文中。此馬之得。文あり。其に北馬を坤の象物。非を如此た。其言は。其に次。右書見の眼高うらむ。人を自於らむ。知るむ物也。其に次。卷筮義の條に論ふ如く。殷世まで七四十五策を用ひし也。姫昌始めて四十九策を用ひて。謂ゆる十八變筮と爲たる。此を百筮中の一筮也。容易に坤卦に出うたき筮法ある也。右の由縁有るが故に。此卦に出片らむ事を欲して。殊小

巧免る筮法ある也。思ひ合をて辨ふ法也。此事を如何に論ず。孔を此の唯を。また是に就て思ふに。貴復大過。嘆解損大九を云ふ。利有攸往。と云ひ。此利无妄。象也。不利。益。革。巽。象辞也。利有攸往。と云ひ。此利无妄。象也。不利。有攸往。と云ひ。また大有。无妄。大畜。晋。恆。節。の象辞。不利有攸往。見え。中。小。と巽。及。ひ。益。象辞也。利有攸往。利涉大川。と云ひ。需。同人。益。大畜。益。渙。中。象。象。利。涉。大。川。と云ひ。訟。象。小。利。涉。大。川。と云ふ。を思ふ。又。利。涉。大。川。と云ふ。利。涉。大。川。と云ふ。見え。利。涉。大。川。と云ふ。此。を。み。お。殷。に。討。入。る。決。断。の。讖。辞。あり。大。川。を。涉。る。利。と。不。利。と。を。云。ふ。は。彼。都。に。攻。至。る。也。謂。ゆる。孟。津。に。大。川。を。涉。ら。ず。入。る。と。能。た。次。是。を

以て其决断を示さむ為也。此辞をく多く出さる。抑古文
也。今文と恒山山川を熟語として相對し云。習ひある
ふ斯るなり大川口渉る誠めを云む。利越大山。其不
利越大山。おと云ふ誠めも元くそを得有るまじき事ある
お其辞お一形たふ無き。憶お逆意の張本より作れ。象又
の文と忽ふ知。お事おてさしと。お意お合を。西
ふお堪たる父子。お兼漏にこそ有る。おまた古今の學者
お一人。お此義お心著たる。无。おて東北巽風の定位。良
きを是また何ちふ。漏をも。配し。西北良山の定位に。乾を配する意也。お申考ふるに。
巽の良を重ぬれ。山風盡の卦と成り。良小乾を重ぬれを。
天山遯の卦と成る。えり此を。お差里小拘を。おし時小国
小在り。る子等。及ひ其臣属とも相謀りて。紂王小美女奇
物を進りて。盡惑を。おしめ。姫昌り罪小贖了るに。紂王甚く悦

ひて。故還せる耳。おらを征伐を專小。お事と許され。お姫
昌り。お虎尾を履む。厲さを。遯れて。岐周小帰。又て陰小徳を
修め。是小新に正朔を立て。此を受命。お元年と云ふ。遯盡は
二卦。お此履歷お能くも符。お。此。史記。お殷周。お本紀。及
尚書の大誓。及ひ上り引く。お。然れ。お。遯卦の象辞。お。
目。お傳。おも参考。おし。お。然れ。お。遯卦の象辞。お。
遯亨。小利貞。と云ひ。盡卦。お象辞。お。盡元亨利。涉大川。先甲三
日。後甲三日。と繫々て。後。お大川を。涉りて。攻入。お。日。撰。お
片。お。示。お。礼。朱熹。お本義。に。遯卦の注。お。其。占。為。君子能
遯。則。身。雖。退。而。道。亨。小。謂。陰。柔。之。小。人。と云ひ。盡卦。お注。お。盡
壞。極。而。有。事。也。盡。壞。之。極。乱。當。復。治。故。其。占。為。元。亨。而。利。涉。大

川^{キニ}甲^ニ日^ニ之^レ始^ル事^ノ之^レ端^也也。先^ニ甲^ニ三^日辛^也也。後^ニ甲^ニ三^日丁^也也。前^ニ事^ノ過^ル中^ニ而^テ後^ニ事^ノ方^ニ始^ル然^レ更^ニ當^ニ致^ス其^ノ丁^寧之^レ意^ヲ以^テ監^ス其^ノ前^ニ事^ノ之^レ失^ト云^フ。其^ノ方^ヲ得^ルた^ル説^{ナリ}。但^シ盡^卦ノ説^ハ郭^玄先^ニ之^レ三^日而^テ用^辛也。取^レ改^過自^新之^レ義^後之^レ三^日而^テ用^丁也。取^レ其^ノ丁^寧之^レ義^也ト云^フ子^ノ小^ニ批^レれ^ル説^{ナリ}猶^下云^フ云^フ也。見^ル斯^レ之^レ姫^且也。此^ニ二^卦其^ノ爻^ヲ辭^ヲを^レ繫^スる^也。即^チ之^レ父^ノ意^ヲ承^ルて。每^々其^ノ履^歷を^レ節^序し^テ盡^卦ノ初^六也。幹^父之^レ盡^有子^考无^咎。厲^終吉^ト云^フ。遯^卦ノ初^六也。遯^尾厲^勿用^有攸^往。初^六云^フ子^ノ餘^爻ノ辭^也此^ノ準^子を^レ知^ル也。意^ハ盡^卦ノ昌^が美^里也。四^九也。礼^シテ盡^卦ノ幹^也然^ル子^ノ其^ノ子^ト也。及^ビ即^チ下^ニ相^計り^テ紂^王ノ美^女奇^物を^レ進^ル其^ノ父^ヲ救^フ片^しめ^キ有^子考^无咎^トハ是^也。皆^也厲^ノ也。し^テ未^終也。紂^ヲ亡^カシ^テ吉^ナリ^キ也。大^遯卦^ノ意^ハ虎^ノ尾^を履^ス

め^ル如^キ厲^キ所^ヲを^レ遯^水た^ル由^ハて尾^厲を^レ紂^ノ警^也なり。勿^レ用^有攸^往トハ此^ノ卦^ノ爻^ヲ得^ルた^ラむ^ル也。彼^ノ地^ノ討^入る^也。勿^レ用^有事^也云^フ也。皆^也姫^祭り^般也。攻^入る^也。父^ノ示^スる^也。と^レ誠^めた^ル義^也なり。皆^也姫^祭り^般也。攻^入る^也。父^ノ示^スる^也。と^レ日^取を^レ用^ハし^事也。史^記云^フ。十^二月^戊午^師畢^渡盟^津と^有る。少^ク知^ル也。此^ニ甲^ノ後^ニと^シ三日^丁巳^ノ日^ハ丁^寧也。其^ノ意^ヲ致^シて事^ヲ始^メ。翌^日ま^テ師^ヲを^レ盟^津を^レ渡^リ畢^スた^ル也。但^シ一^日後^礼し^事を^レ下^ニ引^ク顧^炎武^ノ説^{ナリ}。用^ハる^故實^向る^也。思^ハふ^合を^レ辨^ス。斯^レ紂^王と^對陣^シて。克^カた^ル也。二^月甲^子ノ日^ナリ。史^記云^フ載^ス。此^ニ曲^礼也。外^事以^テ剛^月と^有る^日撰^ハ合^ヲ是^ニた^ル姫^昌り^示し^遺せ^ル日^取を^レ用^ハし^事也。先^ニ甲^ニ三^日後^ニ甲^ニ三^日と^云ひ^テ甲^日

を中取。朱熹注。甲日之始事之端也。と云。予る相
發して辨ふ。呂氏春秋。武王已子大川を涉。水の時
予る武王見て。將以甲子。至殷郊。子以是報矣。と云。ひて歸ら
る。其より日夜。雨ふりて。休。軍勢。み。休。まむ。と請し。
と疾行。おめ。果して。甲子の日。不。殷の郊。不。至。し。と見え。
史記。二月。甲子。乃。誓。と有る。所。注。不。孔安國。曰。癸亥。夜。陳
甲子。朝。誓。之。と有る。由。何。旅。事。と。聞。え。た。う。○我。徒。不。粟。原
信。充。と。て。道。甲。式。を。精。究。せ。る。人。何。也。此。考。を。祝。を。な。し。千。を
打ち。て。此。を。道。甲。子。日。撰。を。用。ひ。し。物。あ。ら。む。と。云。不。華。て
六。を。推。試。て。此。と。云。予。を。一。月。の。あ。ら。む。う。勞。き。て。太。初。曆。術。を。見
多。推。し。る。果。し。て。道。甲。子。日。撰。を。用。ひ。て。其。主。國。を。厭。勝。を
治。し。る。有。り。ら。其。說。長。れ。れ。此。の。著。片。に。姫。昌。り。識。文。の
ふ。れ。畏。る。厚。き。事。あ。ら。む。也。○此。を。革。卦。の。象。辭。に。草。已。日。乃。孚。元。事。利。貞。悔
亡。と。云。予。る。を。紂。の。打。克。て。其。首。を。斬。る。日。子。甲。子。あ。る。を
思。ふ。不。甲。子。の。素。懷。を。遂。了。と。も。か。如。德。不。慙。と。り。云。不。如

く。朱熹も本義に。變革之初。人未之信。故必己日。而後信。所革
之悔亡也。と云。予る如く。其日頃の慙悔の事。亡あむと云
予る識文あり。顧炎武。曰。知錄。の。草。已。日。乃。孚。六。二。已。日。乃
爰。故。易。之。所。貴。者。中。十。干。則。戊。已。為。中。至。於。已。則。過。中。而。將。變。
之時。矣。故。爻。之。以。庚。庚。更。也。天。下。之。事。當。過。中。將。變。時。然。後。革。
而。人。信。之。矣。古。人。有。以。己。為。變。改。之。義。者。儀。禮。少。牢。饋。食。禮。曰。
用。丁。已。法。內。事。用。柔。日。必。丁。已。者。取。其。令。名。自。丁。寧。自。變。改。皆
為。謹。敬。而。漢。書。律。歷。志。亦。謂。理。紀。於。己。欽。更。於。庚。是。也。三。彌。謂
即。日。不。孚。己。日。乃。孚。以。己。為。己。事。盡。住。之。已。恐。未。然。湯。武。革。命。
惟。有。慙。總。是。有。悔。也。天。下。信。之。其。悔。亡。矣。と云。ひ。彼。易。小。帖。の
朱。漢。上。震。以。先。後。庚。申。推。之。當。是。戊。己。之。已。此。是。確。解。と云。予
る。然。不。然。言。也。故。是。を。以。て。此。卦。の。象。傳。に。己。日。乃。孚。草
而。信。之。草。而。當。其。悔。乃。亡。天。地。革。而。四。時。成。湯。武。革。命。順。乎。天
而。應。乎。人。草。之。時。大。矣。哉。と。言。予。る。然。れ。と。湯。武。の。革。命。何。の

順天忘人、其拳と云々也。實不て天命時日、託トクきたる。其
天逆上の拳ヲたる故也。湯誓、泰誓、これ証言たる有り。其
湯誓、衆庶、小告、言、爾、尚、輔、予、一、人、致、天、之、罰、爾、不、從、誓、
言、予、則、殲、戮、汝、云々、と云ひ、太誓、衆庶、不、可、言、不、今、予、發、
維、共、行、天、罰、勉、哉、夫、子、不、可、再、不、可、三、と云ひ、牧誓、今、予、發、
惟、恭、行、天、之、罰、夫、子、勛、哉、爾、所、弗、勗、其、亦、爾、躬、有、戮、と云ひ、
ふと見え、今、予、強、て、人、を、從、は、志、免、し、事、は、と、謂、ふ、予、
也、斯、て、偽、古、文、仲、虺、之、誥、中、成、湯、放、桀、于、南、巢、惟、有、勳、德、曰、予、
恐、未、世、以、台、為、口、實、仲、虺、乃、作、誥、と見え、今、予、果、して、後、世、
亦、れ、口、實、と、して、武、發、を、湯、が、子、孫、に、紂、王、を、殺、して、國、
を、棄、り、了、然、と、す、と、呂、氏、春、秋、に、武、王、勝、殷、乃、恐、慎、大、息、命、
周、公、旦、進、殷、遺、老、而、問、衆、之、所、說、民、之、所、欲、復、盤、庚、之、政、と有、
る、と見え、已、日、乃、乎、悔、亡、と云ひ、衆、之、所、說、民、之、所、欲、復、盤、庚、之、政、と有、
國、史、補、小、高、定、貞、公、郭、之、子、也、年、七、歲、讀、書、至、牧、誓、問、父、曰、奈、
何、以、臣、伐、君、答、曰、應、天、順、人、又、問、曰、用、命、賞、於、祖、不、用、命、戮、上、
於、社、豈、是、順、人、父、不、能、對、と有り、卓、見、ある、小、兒、あり、き、
第四條、引、た、る、通、卦、驗、の、文、小、周、文、增、通、八、之、節、以、繫、王

命之瑞、與亡殊、方各有其祥、と有り、語、其、真、實、ある、こと、是、と
以て知る也。又史記、日者傳、ある、史、遷、の、語、小、自、古、受、命、
王者、何、嘗、不、以、卜、筮、決、於、天、命、哉、其、於、周、尤、甚、と云ひ、予、を、熟、
く、味、道、讀、み、て、欺、天、の、詐、也、周、尤、甚、し、の、也、と、事、を、諱、ふ、
也、ト筮を以て受禱の天命を史を事實と尚書舜典に
舜が禹の位を禱する所を始めて見えて既、本篇、小、論、
予、が、如、く、曲、礼、に、卜、筮、者、先、聖、王、之、所、以、使、民、信、時、馬、敬、鬼、
神、思、法、令、也、亦、以、使、民、決、疑、定、猶、與、者、也、と有り、た、信、小、論、
説、ある、を、用、ふ、た、此、を、甚、し、く、用、ひ、し、故、に、史、
遷、を、あ、く、を、予、り、實、に、然、る、説、を、用、ひ、し、故、に、史、
逆、意、を、披、る、る、危、辭、多、の、也、其、尤、き、件、々、を、抄、さ、た、師、象、の、
師、文、人、吉、无、咎、小、畜、象、の、密、雲、不、雨、自、我、西、郭、履、象、の、履、虎、尾、
不、啞、人、亨、大、過、象、の、棟、撓、利、有、攸、往、亨、坎、象、の、坎、有、孚、維、心、亨、

行有尚。明夷象。利艱貞。第象。又。第亨若第不可貞。蹇象。利西南。不利東北。歸昧象。凶无攸利。と有る。と。皆そ。孔子
の殷を討む時。識文の依れ。の意。此文あり。却て。目易
因。大傳。云。依。易。者。有。憂。患。乎。當。文。王。與。紂。之。事。乎。其。辭。危。困。謂
危。辭。多。在。文。文。辭。亦。文。王。依。非。也。と云ひて。此等。此。辭。を。引。出
し。此。皆。文。王。象。辭。可。謂。不。危。乎。文。王。序。易。承。卦。繫。象。周。公。義。考
逐。此。繫。辭。公。當。自。言。文。王。我。所。孔子。亦。謂。文。王。无。憂。父。作。子。述
即。此。類。也。今。檢。文。辭。如。隨。云。王。用。亨。于。西。山。化。云。王。用。亨。于。岐
山。指。文。王。岐。周。也。明。夷。云。明。夷。于。南。狩。得。大。道。指。武。王。謀。紂。也。
箕。子。之。明。夷。指。箕。子。為。奴。也。小。畜。履。隨。皆。陰。用。文。武。為。象。歸
妹。之。九。五。泰。之。六。五。引。當。王。帝。乙。是。文。王。所。親。臣。事。者。也。凡。此
皆。足。以。徵。文。辭。之。非。出。自。文。王。甚。明。也。蓋。周。公。相。武。王。謀。紂。伐
商。晚。遭。流言。憂。患。之。文。考。同。故。繫。象。往。事。真。切。如。此。後。世。過。信
班。史。故。野。方。改。箕。子。之。明。夷。為。其。子。或。援。兩。雅。叙。岐。山。為。二。蓮
之。山。非。岐。周。或。謂。帝。乙。為。成。湯。非。紂。大。皆。以。附。合。文。王。作。文。辭
之。說。帝。固。僻。皆。可。哂。也。と云。抑。姬。昌。の。周易。上。下。篇。の。象。辭
の。尤。信。不。然。言。あり。し。と云。

其子和之。と云。牙。の。如。く。長。子。姬。登。そ。志。を。果。し。次。子。姬。旦
そ。汝。意。を。繼。て。六。爻。の。辭。を。依。れ。り。是。を。以。て。毒。意。偽。巧。至。り
ぬ。所。あり。實。に。叛。逆。邪。謀。の。本。鐸。あり。と云。但し。其。象。文。の。辭
を。行。ふ。時。に。其。卦。文。を。得。て。而。し。て。後。に。其。事。迹。を。繫。た。る。り
尤。明。也。此。と。其。爻。辭。に。姫。登。が。紂。の。克。て。後。に。事。迹。も。多。有。る。を
姫。旦。の。爻。辭。を。繫。る。時。に。正。に。其。事。有。り。し。と云。亦。更。に。引。り
斯。て。其。結。を。得。た。る。事。を。と。偽。巧。の。思。ひ。合。さ。る。事。を。と。拾
ひ。集。め。て。又。不。係。た。る。繫。辭。傳。の。解。卦。の。爻。辭。を。評。して。作。易
事。尤。云。亦。更。あり。繫。辭。傳。の。解。卦。の。爻。辭。を。評。して。作。易
者。其。知。盜。乎。易。曰。負。且。乘。致。寇。至。負。也。者。小。人。之。事。也。乘。也。者
君。子。之。器。也。小。人。而。乘。君。子。之。器。盜。思。棄。之。矣。上。慢。下。暴。盜。思
伐。之。矣。慢。藏。盜。盜。治。容。誨。易。曰。負。且。乘。致。寇。至。盜。之。招。也。と

云天をも思ふなり。彼周易上下篇をも。誨盜誨淫のみならず。謀殺^弑逆の誨^誨も。殊^殊あそむ要旨を有りり。其^其か
傳^傳ありし司馬季至^至分^分語^語不^不伏^伏義^義依^依八卦^{八卦}周^周天^天王^王演^演三百^{三百}八^八十^十四^四
之^之越^越王^王勾^勾踐^踐文^文王^王八^八卦^卦以^以破^破敵^敵風^風天^天下^下霸^霸と有^有る也^也然^然る言^言
み^みて此^此句^句踐^踐り吳^吳の囚^囚を以^以て吳^吳王^王を冀^冀を嘗^嘗め固^固あり美^美女^女
財^財宝^宝を贈^贈りしめて其^其心^心を取^取り遂^遂に救^救されし後^後に
兵^兵を起^起して吳^吳を亡^亡せし事^事は能^能くも姫^姫歸^歸や仰^仰いたると思^思
ふ^ふなり故^故是^是を以^以て彼^彼蒙^蒙卦^卦を聖^聖人^人死^死を告^告れし大^大盜^盜止^止むと
を言^言する其^其の成^成湯^湯及^及ひ姪^姪昌^昌が父^父子^子ら分^分類^類ひ
ある擬^擬聖^聖をこそ言^言ひ豈^豈真^真聖^聖をしも然^然云^云むや 然^然れを
彼^彼國^國にこと。王^王統^統も定^定位^位なき固^固めたり有^有らむ存^存るなり。
皇^皇統^統无^无窮^窮不^不續^續の世^世給^給ひ。君^君々^々なり臣^臣々^々たる皇^皇國^國の人^人あり
能^能信^信し読^読べき書^書ふべ^べ非^非久^久皇^皇國^國に人^人の志^志を。此^此を能^能く信^信し
仰^仰ひたる也^也。此^此條^條義^義時^時ありき。さるる義父の時も前蹤ありき
お非をもて湯武も亦も革命

此^此るは口^口實^實として天皇^{天皇}の詔^詔對^對し奉^奉り畏^畏くも辭^辭辭^辭らむと
て三^三柱^柱に天皇^{天皇}を鳴^鳴ら放^放ちし奉^奉れり是^是あり何^何の恐^恐るる事^事き
事^事ありさて本文^{本文}に危^危者^者使^使平^平易^易者^者使^使傾^傾云^云々^々とて。彼^彼上^上下^下篇^篇
の辞^辞を。常^常の占^占判^判に用^用ふる意^意定^定を云^云するなり。其^其辞^辞の危^危險^險
あるを平易^{平易}に取^取らし。平易^{平易}あるを傾^傾覆^覆せしめ用^用ふる
時^時も。其^其道^道甚^甚大^大きに。百^百物^物ありの察^察關^關なく。衆^衆事^事悉^悉く備^備たるを。
殊^殊に戒^戒懼^懼を存^存して終^終始^始せしむ。其^其要^要妙^妙なき不^不歸^歸也^也。此^此周易^{周易}
之道^道を仰^仰ふ。今^今は儀^儀律^律の徒^徒に強^強ひて講^講言^言して季^季主^主君^君平^平
口^口に神^神を得^得むと計^計は命^命たり然^然して此^此易^易を然^然れど彼^彼六^六爻^爻とて。
法^法を用^用ひむ事^事も敢^敢て告^告る事^事ありそ然^然れど彼^彼六^六爻^爻とて。
十^十有^有八^八爻^爻に平^平術^術ありそ事^事々しむれ。實^實も俗^俗に畧^畧筮^筮して。
著^著を撰^撰ふるに。八^八を以^以して内^内外^外卦^卦を立て。多^多れ六^六を以^以て著^著
。平^平九^九る。

と撰りて。爰又と正る易法小類たる拙法もそ有るなり。此
笑しや。

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

2

